
2 代目勇者の災難

ごんたろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2代目勇者の災難

【Nコード】

N7952P

【作者名】

ごんたろう

【あらすじ】

大陸の東側、ゲセドウル山脈から向こうは、魑魅魍魎が棲まう魔界となっている。

その頂点に君臨するは、絶大な力を持つであろう魔王ヴェルディルガ。

魔物退治でちょっとは名の知れた傭兵が、夢に現れた女神のお告げで、勇者に選ばれ魔王退治に行くことに！

なんで、こんなコトになったのか。

そんな相手に相対し、果たして俺は生きて帰ることが出来るのか！？
不運な勇者のとんだ災難を描いた物語……か、どうかは読んでお確かめ下さいませ。

多少拙いかもしれませんが、どうぞよろしく！

裏設定的な落書き（前書き）

2011年5月23日

10000pv突破しました><

こんなに読んでくれているのかと、嬉しくて（
何かしたくてしょうがない！！）

もうそろそろだと分かっていたので、次話更新できればと思って
いたんですが、気が乗らずに間に合わなかった（ＴＴ）

何事も楽しみながらがポリシーなもので、気長に待って下さいな。

この「裏設定的な落書き」は、何かしたくて急きよ上げた落書き
です。

結構な乱文で、本編に出る事は無いであろう裏設定が書き殴られ
ています。

読まなくともまったく支障はありません。

そして、そんなに面白い物でもないと思われます。

小嘶にすれば多少はおもしろかったかも知れませんが、ほんと
に書き殴っただけです。

興味のある方だけどうぞ（*^|^*）

裏設定的な落書き

～落書き～

此処では、裏設定的な落書きを描き殴っております。

小説に出てこない細かい設定、実は結構たくさんあるんですよ～

（ネタあるんだったら、小説に活かせよ！）

……活かせない未熟者なのですorz

> i 2 1 9 7 0 — 2 0 8 4 <

誰だか分かるでしょうか？

バпамメレです。ひつじっ娘

個人的に気に入っているキャラでして、無性に描きなくなった事があったのです。

シャーペンで描いた絵を写真に撮って、そのままパソコンソフトで色塗りしてしまったので、ちょっと彩度が良くないですが。

バпамメレは、パーン族という半ひつじの種族の族長をしております。

半ひつじなので髪は羊毛です。

パーン族は基本、村で共同生活を送り、伸ばした髪を切って毛織物に加工し、売って生計を立てています。

バпамメレを含むパーン族の髪は長かったり短かったり。パーン族にとって、髪は大切な一族の共有財産なのです。

そんな一族には、古くから伝わる恋のおまじないがありまして。片想いをしているパーン族は、髪をひと房だけ呪い用に結んだり編んだりして他のと分けて伸ばすのですよ。商品用に髪を切る時もこの髪だけは切らないでそのままにしておくんです。

それで作った物（ブレスレットやハンカチなど）を好きな人に告白時に渡すと、髪が長けりや長いだけ思いが実するというおまじないがあつたりするのです。

それだけ長い間、君の事を想っていたんだ！的なそんな感じ。

現代に置き換えると、給料三カ月分の指輪を贈ったとかそんな感じですよ。

一族の中にバпамメレを好きな幼馴染の男の子がいて、伸ばしに伸ばして服を作っちゃうのだけど（それだけ長年想い続けた）、いざ、バпамメレに渡したら、

「（他人の毛を着るのが）気持ち悪いからいらない」と、バッサリ切り捨てられてしまうとか。

こうやって、バпамメレは無邪気な一言で相手にトラウマを与えます。

語尾とか気にしない乱文でごめんよ。

文章書くの苦手なのさ>>

落書きって事で大目に見てくださいな。

落書きパート2【8月17日追記】

魔界唯一の鍛冶師ログジェグバ・ドッドは、見た目50代ぐらいのオッサンです。

人間の鍛冶師ラグアスに師事し、剣の打ち方を学びました。

魔界の住人は、基本、強さに関して多少の自負があります。（もしくは、そんな事を気にしない超マイペース）

なので、剣や槍、盾などの武具の類には関心が少なく、ドッドが造るまで魔界には武具を造る職人は皆無で武器も人間界の者が偶に流れてくる程度で、ほとんど存在しませんでした。

鍛冶師としての師匠ラグアスは人間ですが、仙人のように今でも存命中。

このラグアスのことを、師匠として尊敬し、世話になったことを感謝し、あらゆる意味で恐れているドッドは、彼に頭が上がりません。

ラグアスは基本、人間界にいます。

現在は鍛冶師としては引退し、何処かに潜伏中。

故にドッドが魔界唯一の鍛冶師。

そして、ラグアスが打つのは名匠と呼ばれるに相応しく素晴らしい剣ですが、魔法効果などが無いという点では普通の剣です。

魔剣の造り手は、ドッドが史上初であり、現在、他に造れる者が居ません。

（巨人族のガギヤとダラという兄弟が弟子志願中ですが、無下に断られてます。）

魔剣に禍々しいイメージがあるのは、唯一の造り手であるドッドの趣味が悪いせい。

あまりの趣味の悪さに倦厭されますが、その効果が素晴らしく絶

大だという事で、魔界ではそこその値段で売れる事には売れます。
（日本円価値にして何十万単位）

そして、魔界で細々と出回っている魔剣ですが、ごく稀に（過去数回程）、人間界に流れたことがあります。

あまりの禍々しさと魔法効果に、怪しげな趣味のコレクターやら魔王崇拜やらの人間達には、コレクションに儀式用にと大人気。

闇オークションに出品されれば、何処からそんな金が？と不思議に思う程の高値で取引されます。（日本円価値にして何十億）

闇オークションでこっそり取引される額なので、魔界では殆ど知られていない事実です。

（因みに宰相は知ってます）

登場人物紹介（前書き）

本編中には出せそうにないので、こちらで容姿などを挙げときますね。

こちらを読まなくても、本編を読むには全く支障はありません。

既に出来上がったイメージを崩したくないという方は、スルーしちゃっても大丈夫です！

もしかしたら、ネタバレ含む可能性有りなので、本編を読んでから読むのがオススメです。

登場人物紹介

〕 登場人物紹介 〕

魔王ヴェルディルガ・ジョセフ

金色なんだか茶色なんだか判らない髪に、オリーブ色の緑の瞳。

襟足に掛かる位のその髪は、癖毛なのか、天パなのか緩く畝っている。

世界最強を誇る種族の中でも、史上最強を誇る程の魔力の持ち主であり、癖者揃いな魔区の民を統率している最高権力者（？）。

ちょっと情けない性格だが、それを知るのは魔区の中でも一部のみ。

「襲い来る脅威！！ 危機回避の為の政策提言」の時点で既に、約百歳の子持ち。

宰相ウィーズ・セズシルバス

透き通った色合いの薄い水色の瞳に、髪は殆ど白に近い銀髪（僅かでも光に照らされると蒼味を帯びる）。

髪は魔王と同じく長くはないが、左横の一筋だけ、肩を過ぎる程に伸ばして翡翠の石に通している。

事務仕事ばかりをしてるが、実は戦闘においてもかなりの実力を持つ風使い。

記憶力が良く数字に正確で、無駄な事に時間を費やすのが余り好きではない。

プライド高く、真面目な性格。

淫魔族リーリトウ

髪色は暗めのマゼンタ、瞳は瑞々しいオレンジ色の妖艶な美女。

夢の中では相手の好みの姿に変えることができる……が、そのままな事が多い。

男の夢に顕れては、気の済むまで（もて）遊び、イキナリ男の前から姿を消しては、その後堕ちていく様を見て満足する。

（別に、男に恨みがある訳ではない。堕ちていく程自分に夢中になった男を観ると、気分が良いからだ）

男好きと認識されていることが多い（確かにそうだが、本当の意味で愛し可愛がるのは女の子である。

基本、好き勝手に生きてはいるが、要領が良く、仕事を任されれば的確にこなす。

愛称はリリトウ。

鍛冶師 ロッグ ジェグバ・ドッド

髪の毛は鼠色。瞳は碧がかった灰色。

髪と同色の口髭を生やし普段は整えているが、何かに夢中になると手入れを忘れ、無精髭となる。

世界一の腕前を持つ魔界唯一の鍛冶師である。

運が良いのか（悪いのか）希少な生物や珍しい物とのエンカウント率が高い。

パーン族族長バパムメレ

白に近いベージュの髪に、アンバーの色の瞳で、髪は羊らしくクルンとはねているが、ふわふわしている。

（注・モコモコとはしていません。モデル羊はラッフェルです。そして、瞳のアンバーは琥珀色ではなく、ミルクティーのようなまろやかな茶色。）

甘い雰囲気を持った羊人の女の子。

アモン角有り。瞳孔は横長。

見た目、十代後半から二十代前半ころ。

服にこだわり、自分の毛で織られたファー付きのものを愛用している。

植物性ならまだいいが、他者の毛で作られた布は、素肌の上から直接には決して身に付けない。

考えてものを言っているのかいないのか、時折、無邪気に心を抉る。

バпамメレの何気ない一言に、トラウマを植え付けられた者も、数あまた……。

將軍デルクバレス

茜色の瞳に、縦長の瞳孔。髪は山吹色。

竜人であるズメイ族の次期族長。

一族で随一の強さである彼は、本来なら族長という立場にあるはずであるが、將軍を務めているという名目のもとに父の後を継いではいない。

しかし彼は將軍としての仕事も、たまに兵士たちの相手をし、有事に多少彼らを取り纏めるのみで、日常的には本当に何もしていない。

魔法としては、火を出す事が出来るがそれだけ。卓越した剣術と馬鹿力が取り柄である。

自分より強い者と戦闘を行うと、次第に我を忘れて見境がなくなり、負けた後も七日七晩暴れまくる。

食べ物に目が無く、物事を自分に都合の良いように捉えがち。

唯我独尊。

登場人物紹介（後書き）

キャラが増え次第、順次こちらのものんびり書き足します。

こんなことも知りたいというご要望があれば、メールでも感想でも、ごんたろう迄どうぞ！！

作者でも判らないこと、もしくは、ネタバレ的なもので無ければ、出来るだけお答えしますよ。

序章 その1

勇者の振るう聖剣ロドリゲスは、魔王の腕を切り飛ばし、その胴を抉り取る。

しかし、魔王は度重なる攻撃にも動じずに、只その笑みを深めるだけであつた。

尋常ならざるその姿に今までにない戦慄を覚える。

手応えは確かにあり、魔王は確実に手傷を負っているはずなのに、どうあつても勝てる気がしない。

募る焦燥に嫌な汗が背筋を流れた。

自らも剣を持ち相対する魔王は、こちらの攻撃を誘うように隙を見せ、その身に攻撃を受ける。

まるで、筋道の決まった剣舞のように。

畏かと思えもしたが、様子見をしたとて何が解かるう？

たとえ畏だとしても、魔王の根城に乗り込み戦いを仕掛けてしまった今、もう後戻りはできなかつた。

魔王の肉を削る度、辺りに赤い飛沫が舞い散って、徐々に広間を染めていく。

ただひたすらに剣を振るい、いったいどれ程の時が経ったのか。

唐突に魔王が倒れ、戦いは終焉を迎える。

精神を激しく消耗させられた2代目勇者は、さして怪我もないのに地に倒れ伏した。

本当にこれで魔王は死んだのか？

胸の内に残る不安からは目を逸らし、勇者と呼ばれた男はその意識を手放した。

勇者が気づけばそこは祖国エレミアの辺境だった。

その後、魔王を相手に勝利して、無傷で生還を果たしたその勇者の逸話は、聖エレミア国の伝承国書に記載され、子供の寝物語として多くの者たちに語り継がれた。

歌劇や絵画の題材としても取り上げられ、この世界に彼の勇者の

名前を知らぬ者は無い。

しかし、彼自らが、魔界での出来事を語ることは、生涯を通じてなかったという。

ただ国王に、魔王を倒したことの報告をしたのみだ。

それ故、人々の関心はさらに高まり、そのたくましい想像力に話は豊かに膨れ上がるのだった。

女神に授けられし彼の聖剣は、神殿に奉納されて、この後何百年も大切に保管された。

神殿を参拝した人は、伝説の【勇者の剣】に感嘆の溜め息を零し、おとぎ話の中に伝わる魔王と勇者の壮絶な戦いに想いを馳せる。

勇者はどんな思いで、魔王に立ち向かって行ったのか？

魔王に打ち勝つ勇者の力は、如何ほどのものであろうかと。

序章 その2

与えられた役目を果たして地に伏した男を、魔区外に送る。

当初の予定通りに、男の身体にはかすり傷一つなかったが、その顔には苦悶が浮かび、思わず同情を禁じ得ない。

扉が広く開け放たれ、解放された謁見の間。

標準人間型で考えて、収容人数10000人規模のこの大広間は、この日のために価値ある調度品が全て片付けられ、実に広々として
いる。

魔区で宰相を務めるセズシルバスは、ゆつくりとその広間に視線を通した。

床に多少の傷はついたが、破損といえる破損は特に見受けられない。
い。

唯、床に敷かれた絨毯だけは魔王の血肉と臓物で汚れてしまった。

安物に代えていて良かったと喜びたいところだが、これだけの損害でも経理担当の財務長官から文句を言われる事だろう。

まったく、迷惑この上ない。

軽く嘆息すると床に散らばる魔王を見遣やる。

人間たちの間で魔界と呼ばれる此处、魔区は、大陸の東側に位置し、魔区外、つまり人間たちの住む地域とは、山脈によって区切られ分かたれている。

そこでは、魔族と呼ばれる異能異形の者たちによって、ひとつの王国のような体裁をとっていた。

その魔区一帯を統括する世界最強種族の現魔王は、歴代魔王の中でも随一の魔力を誇り、強さと手腕ゆえに魔区中の魔族から尊崇と憧憬を集めている。

そんな魔王が、今はただの肉塊と化してそこらに転がり、床を汚く汚している！

嗚呼、此れを他の者が見たら何と思うことか！！

人一倍、真面目でプライド高い魔界の宰相セズシルバスは、己の仕える魔王の無残な現状をそこそこに嘆くと、片手で空を軽く払った。

途端、巻き上げるような風が起こり、魔王の腕やら内臓やら、そこここに散らばった肉片を一ヶ所に集めていく。

セズシルバスは、更にそこに魔法をかけ、適当に癒すことで魔王の体をくつつけた。

誰が見ても、死骸だろうと判じるような有様で、切り裂かれた無数の傷はそのままだったが、一通り魔王の破片をくつつけたところで、癒すのを止め、風の魔法で王の寝室へと転移させる。

あれで死なないというのだから、魔王の生命力とは恐ろしいものである。

しかし、二週間は政務にも使えないかもしれない。

その心づもりで、ここ一年程は魔王を執務室に閉じ込め、朝も昼も夜も関係なく限界まで仕事をさせて、例え限界がきても軽く癒して続けさせてきたが……。

万一、私の仕事がこれ以上増えるようなら、回復後にこれまでの三倍は働かせて一年の有給休暇をとってやる。

冷めた目をして静かに決意を固めた魔界の宰相セズシルバスは、血で汚れた謁見の間を後にした。

プレリユードは魔界より

事の発端は、パーン族の族長バ Pam メレの一言にあった。

およそ三年前の出来事である。

「魔王さまって、力の成長なかなか終わんないね。そのうち体の方が破裂しちゃったりして」

ふふつと無邪気に笑うバ Pam メレ。

一年ごとに、魔区に住まう各部族の族長が、それぞれに行う部族報告。

その報告後、帰り際にふと思い出したように振り返った彼女は、そんな言葉を口にした。

羊らしくクルンとカールした自らの髪を指先で弄ぶと、じゃあねくといって扉に向かう。

衝撃に固まる魔王をそのままに謁見の間を出て行った。

静まり返る謁見の間。

「そ、そんな……こと、ある訳な……よ、な？」

しばらくの後、上ずった声で訊ねてきた魔王に目を向けると、玉座に居るにも拘らずに顔を青褪めさせて不安そうに見上げてきた。

魔王の威厳は何処へやら。

魔区の民は、普通の人間とは一風変わった異形異能の者たちである。

ただ単に、獣の姿が混じっただけの者もいれば、人には過ぎる怪力や摩訶不思議な魔法を操る能力をその身に宿した者もいる。

多種多様な姿と力を持つ魔区の民はその習慣も様々で、似たような者たちで集まって形成した部族を基本にして生活をしている。

魔王をはじめとする魔城の者たちは、魔区の民のまとめ役であり、魔区内の治安維持や部族間のいざこざの仲裁等を仕事にしているのである。

何はともあれ、先にバパムメレが言った力の成長。

それは、魔力の器の成長を指している。

魔区の民の中でも魔法を操る者たちは、その身に魔力を宿し、身体の成長 人間で言う所の第一次成長と第二次成長が終わると、第三次成長としてその身に宿す魔力量の成長が見られる。

俗に「力の成長」と言われるそれは、種族によつてその期間は異なるが、概ねゆつたりと200～300年ほどで終了し、その身に宿す事の出来る魔力の絶対値が決まる。

体力と同じように、魔力は魔法を使えば消耗し、酷使すれば死ぬこともある。

己の魔力量の絶対値を超える魔法は、何らかの補助なしには使う事ができない。

魔力量の絶対値が高ければ高い程、容易に魔法が扱えるというわけではないが、一度扱いを覚えればその力は計り知れないのである。

歴代魔王の中でも随一の魔力を誇る現魔王は、525年前から魔力の成長が見られ、その成長スピードは未だ衰える事を知らない。

魔力量の成長は、魔法を扱う者にとつて喜ばしいものではあるが、現魔王のそれは確かに異常と言えた。

「そうですね。確かに貴方のそれは異常と言えるでしょう。魔力量の成長過多による身体破裂などという事象は、今まで報告された例はありませんが、通常200～300年ほどで終了するはずのものが、525年、となると有り得ないとは言えません」

誰よりも抜きん出た魔力量を保持する魔王には、その側近を務める私ですら足元にも及ばない。

それ故、政務から逃げた魔王を追跡・捕獲・強制連行し、執務机に固定しておくにも、魔力量に物を言わせて抗われたならば敵うはずも無く、私が魔王の分まで仕事をこなす事になるのだ。

現魔王の魔力成長が異常なことも、魔力量の成長過多による身体破裂が、今まで例に無くとも有り得ない事ではない、ということも嘘ではないが、日ごろの鬱憤を晴らし、ささやかな灸をすえる為主君を少々威す事くらいしてもいいだろう。

一層顔色を無くした己の上司に満足しつつ、茫然自失となった魔王を執務室へと追い立てた。

己の仕える王がこれまでになく強いというのは誇らしいが、太刀打ち出来ないのは厄介だ。

成長などというものは、己の意思でどうこうなるものではないが、精神的圧迫で少しは抑圧されるかもしれない。

魔界の宰相セズシルバスは、この時の発言と安易な考えを、此のち幾度も後悔した……。

襲い来る脅威！！ 危機回避の為の政策提言 Act・1

朝、登城を果たしていつものように執務室前へと転移した。

ノックをして名乗るとすぐに、入れとの声がかかる。

「セズシルバス！」

中に入ると挨拶をする暇もなく名を呼ばれる。

顔を上げるといつになく真剣な顔をした魔王ジョセフがそこにいた。

「一戦頼む。俺を痛めつけてくれっ！！」

数日、青褪めた顔をして言われるがまま仕事をこなしていた魔王は、改まった態度でそう宣った。

魔法を扱う者たちには、その身のどこかに魔力を溜める器があるとされている。

その大きさは、個体差があり器を満たす魔力の量がその者の最大魔力量なのだ。

魔力の器の成長は、その内にある魔力が満たされ、さらに膨れ上

がる事によって、内側から押し延ばされるようにして為される。

吹きガラスのようなものだ。

魔力が満たされていなければ、吹き込むのをやめたガラスのように、その器は膨らむ事をしない。

魔力の器が成長する第三次成長期に入った者たちは、なるべく魔力を消費しないようにするのが常だった。

魔王ジヨセフはそれを逆手に取ろうというのである。

魔力を手っ取り早く消耗するには、魔法による激しい戦闘を行い重傷に陥るのが一番だ。

魔力を持たないものは、体内物質の機能や薬によって怪我や病を治すが、魔力を持つ者たちは、意識のあるなしに関わらず、魔力が消費され傷が癒えていく。

魔力の成長を抑えるための解決策としては、一番問題が無く効果的な手法だ。

魔力の成長期間そのものを終わらせる術は、いまだ解明されていない。

……というより、そんなことを望む者はこれまでの歴史の中に存在せず、魔力の成長期間を終わらせたいと発想する者すら居なかっただろう。

他の手段としては、魔力を際限なく食らう食魔類の動植物を引付けしておく、城の研究者に研究テーマとして提示し、早急な解明を要請する等があるが、どれも問題がありすぎる。

魔王の馬鹿馬鹿しい不安を露呈する訳にもいかず、戦闘相手としては私が一番妥当だが……、

「お断り致します」

即座に発せられた簡潔な一言に、魔王が絶句する。

「当たり前でしょう。貴方を瀕死にさせる為に一体どれだけの魔力と時間を浪費すると思っっているんですか。貴方の些細な不安を一時的に解消するために、魔区のとめ役が二人揃って幾日も使い物にならなくなったら、どれだけの仕事が溜まるか分かってます？ 決裁と指示が遅れば、それだけ下の者の仕事も滞るんで すよ？ まあ、私に仕事を押し付けてサボりがちな貴方には分からないかもしれませんが」

魔王がぐつと呻くも反論する。

「おまえが、仕事のしすぎなんだ。普通の人間と違って寿命も長いんだし、そんなに生き急ぐ事もないだろう？」

「そう言って、先代、先先代、とそれ以前も！書類仕事をサボった魔王たちのおかげで、内諾のみで橋の建築や道路建設、果ては街の増設がなされ、魔区の中核であるこの魔城に、資料の欠片すら、存

在しません！！魔区をまとめ、指示する側に、区域を把握するための資料が無いんですよ！どれだけ由々しき事態なのか、お分かりですか！？」

すぐに返されたその答えに、今度は呻く事も出来なかった。

その翌日の朝も、登城を果たしていつものように執務室前へと転移した。

ノックをして名乗るとすぐに、入れとの声がかかる。

「セズシルバス！」

中に入ると挨拶をする暇もなく名を呼ばれた。

顔を上げるといつになく自信に満ち溢れた顔の魔王ジョセフがそこにいる。

「兵士の、訓練相手を引き受けるというのはどうだろう？」

語尾は疑問形で上がり調子になってはいたが、断られるはずもない良案だとも言つように、どこかフンと自慢げだ。

宰相セズシルバスは、その顔にムカつきを覚えるよりも呆れ果てた。

「どうもこうもありません。そんなこと、認められるはずが無いでしょう。貴方の相手が出来る程のものは訓練などに参加してはおりません。貴方は、魔区の治安を守る兵士たちを潰す気ですか？」

寸分の間も無く返された言葉に、敢無く魔王の自信は撃沈した。

訓練場の兵士たちに『的』として提供するのが、日々の業務に一番差し障りのない方法ではあるが、例え、簀巻きにでもして素性を隠したとしても、攻撃を受けていればいづれ簀巻きの皮は剥がれる。

仕える主に幻滅し、気味悪がって城を去っていく者も出るかもしれない。

そう内心で結論付けた魔界の宰相セスシルバスは、その日も仕事に取り掛かっていった。

襲い来る脅威！！ 危機回避の為の政策提言 Act・3

さらにその翌朝も、登城を果たしていつものように執務室前へと転移した。

ノックをして名乗るとすぐに、入れとの声がかかる。

「セズシルバス！」

「却下です」

中に入ると挨拶をする暇もなく名を呼ばれたが、何か言われる前に即応した。

今日は礼も取っていないが気にする魔王ではない。

「ま、まだ何も言っていないじゃないかっ！！」

「どうせ碌な事は言いません」

「断言ッ！？」

「そんなことより、早く仕事を始めましょう。今日は謁見がございませんので、これらの書類に認可のサインと……」

言いながら、腕を軽く振った魔界の宰相セズシルバスは、転移魔法でどこから発生させたのか、書類で部屋中を埋め尽くした。

「 待つて！？ちよつと待つてくれ！！」

何時にない大量の書類に、青褪めた顔で慌てて宰相の言葉を遮る。

「三度目の正直と言うだろう！？ちよつとでいいから話を聞いてくれっ！！」

切羽詰まった面持ちで、執務机から立ち上がってまで訴える魔王に嘆息しながらも応と返す。

「それで、今度は何ですか？」

その言葉にガバツと顔を上げ、嬉々として話し出した魔王の案

「食魔植物を育てるんだ！！」

その案に、魔界の宰相セズシルバスは厭きれるよりも憐れみを覚えた。

「魔王陛下？」

慈愛に満ちた微笑みと優しい声音で魔王を諭すことにする。

この魔王に接するには赤子に接するよりも強い忍耐を必要とするのだろう。

魔王ジョセフは固まった。

「食魔植物をはじめとする食魔類がどんなものかは、ご存じの筈ですね？」

声を出す事も出来ずに、コクコクと首を縦に振る魔王。

「彼らは、それぞれの種別により異なりますが、食らった魔力に応じて、巨大化、凶暴化、大量繁殖を致します」

声を出す事も出来ず、ブンブンと首を縦に振る魔王。

「歴史上、最大の魔力量を誇る魔王ヴェルデルガ・ジョセフ陛下は、一般魔族の平均魔力量と比べ、現時点で50倍ほどの魔力量があります。平均値の魔力量を持つ一般魔族が10人程食われただけで、小さな島一つ沈める程に巨大化する食魔植物キムガドを、陛下直々に育て上げればどうなるんでしょうね？」

魔王は俯き、優しい笑みを浮かべる宰相の顔からそつと視線を逸らす事で、殺意を纏って鋭く伸びる爪先を見つけた。

「考え込むことも無く、次々と画期的な案を出される魔王陛下はすごいですね」

考え無しにクダナイ案を出せるとは、貴方の頭は空っぽですか？すごいですね。そんな恥さらしな真似は、私には到底できません。

身動き一つなく宰相の言葉を聞いていた魔王に、それはそんな風に聞こえた。

「今度からは、口に出す前に、それを実行に移したらどうなるのかを、よく、考えてみましょう」

物分かりの悪い子供に、囁んで言い含めるように、一言一言、区切って話すセズシルバスの柔らかい声が耳に入る。

恐る恐る窺えば、相変わらず、慈愛溢れる笑みを浮かべる魔界の宰相セズシルバス。

微笑みの下に隠されながらも、渦を巻いて確かに存在する何かを察して、その日から、魔王は言われるがままに、自発的に仕事した。

書類にきちんと目を通し、サインをしながら、ふと思う。

城の研究者たちに魔力の成長期間を終わらせる方法を、解明させれば良いのではないか？

多少時間はかかるだろうが、優秀な研究者ばかりだからきつこの悩みも解決するに違いない。

「セズシル……」

「何でしょう？」

勢い良く宰相を振りかえって、名前を呼び掛けた途端に目にした微笑みに、何でも無いと反射で謝った。

次の書類に目を通す。

考えよう。

そんなこと、セズが思いつかない訳が無い。

折り良くも、目にした書類は、研究者たちからの研究費予算増案書に対する廃案書……。

魔王は自分の反射に感謝した。

数日後の朝、魔界の宰相セズシルバスは、登城を果たしていつものように執務室前へと転移した。

ノックをして名乗るとすぐに、入れとの声がかかる。

「セズシルバスー!!」

中に入ると挨拶をする暇もなく名を呼ばれた。

またか……。

面倒臭さに魔界の宰相セズシルバスは、思わず舌打ちをしたくなつた。

「セズシルバス！勇者を招くぞ！」

自信を粉々に打ち碎かれ、数日、言われるがままに仕事をこなしていた魔王陛下は、希望に瞳を輝かせ、そう宣った。

魔王の手元には一冊の絵本……。

魔区外のものと思われるその絵本には、少し離れたこの位置からでも読める程に、デカデカとした太文字で、

『勇者の冒険〜女神の守護と魔王退治の旅〜』

と、書かれていた……。

襲い来る脅威！！ 危機回避の為の政策提言 A c t ・ 4（後書き）

これで、政策提言シリーズは終わりです。

お楽しみ頂けたでしょうか？

4つセットで、リズムと勢いで書いた（つもりな）ので、4つ通して読んでももらえると嬉しいです。

特に何が変わるという訳ではないけれど……。

暇で死ぬという方は、お暇潰しに是非トライをっ！！

次回は、面子を増やしてお茶会になります。

茶会の集い（制限時間は60分） 前編

【第一回、魔王による魔王の為の勇者プロデュース企画議会】

魔王の私的な応接室には、そんな横断幕が掲げられていた。

「手書きだねえ」

「ええ、手書きねえ」

パーン族の長バパムメレの言に応じたのは、淫魔族のリーリトウである。

彼女らは、まるでありふれた天気の話でもするかのように、その横断幕を見上げていた。

繰り返すが、此処は世界最強を誇り、畏怖と尊敬でもって魔界を治める魔王陛下の居室の内の一部屋である。

その他にもこの部屋には、魔区内の錚々たる顔ぶれが集っていた。

「なあ、腹減ってんだけど、飯ないのか？」

全員魔王の顔なじみであり、こんな馬鹿げた魔王の計画を知らされても帰ってくる反応と言えはこんなものである。

部屋に集う面々は、華奢な細工が施された美術品とも言えるテーブルを囲み座っている。

それぞれに紅茶と茶菓子が配されており、テーブルの中央にも大皿が5枚程、焼き菓子を盛り並べられていたが……。

席が埋まって5分と経たずに5枚の皿は空いていた。

魔王は紅茶で口を湿らせ、受け皿にティーカップを戻す。

立ち上がって口上を述べ始めた。

「えー、ではこれより、第一回、魔王による魔王の為の」

「陛下、私はこの一時間のみと、申し上げた筈ですが」

応接セットの一人掛けソファーから立ち上がり、開会宣言を始めた魔王に釘を刺す。

「二回目以降の開催を、許した覚えはありませんよ？もちろん、分かっているんですよ？」

「……はい」

「それなら結構。どうぞお続けください」

促された魔王は、宰相の顔色を窺いつつ会議の進行を始めた。

「え、え、では、これより、第一回、魔王による魔王の」

「ねえ、メンド臭いし、始めるならとっとと始めちゃってくれな
い？」

少々甘めの幼い声でバпамメレが言う。

彼女は小首を傾げながら魔王を見上げてそう言つと、早くも興味
を失ったのか、視線を落とし、胸元のファーを指先で摘まんて弄り
だした。

クルリと毛羽立つ羊毛のファーは、羊人であるバпамメレの髪質
と全く違う。

その性質の半分は羊であるというのに、相変わらずの露出の多さ
だった。

「渡された資料に一応目を通しはしたが、一体、何を話し合う
というんだ？」

「筋書きは決まっているようだからあ、配役を決めるんじゃない
？」

「飯ねえのかって聞いてんのによお」

それぞれ、好き勝手に話し合う俄か議員たちに魔王は涙目になった。

「残り時間は45分です」

無情に響く冷徹な宰相のカウントに、慌てて気を取り戻す。

「き、聞いてくれえ！」

もはや威厳も何もない。

情けない大声に静まり返った隙を逃さず魔王は一息に言いたてた。

「第一回、魔王による魔王の為の勇者プロデュース企画議会を始め
る！議長と進行はこの私魔王ヴェルデルガ・ジョセフが務める！
会議の開催意図はこうだ！この私、魔王ヴェルデルガ・ジョセフ
の第三次成長がなかなか終わらず、魔力の器は膨れ上がるばかり！
！このままでは私が爆発してしまう恐れがあり、成長を抑えるため
に戦闘により重傷を負いたい！そのため、魔区外から勇者を立ち上
げることになったので、諸君らには協力を要、請す……r」

息が切れ、ぜいぜいと呼吸を繰り返す魔王を余所に、各々勝手に
喋り始める。

「うわゝ、あれ信じたんだ」

「おまえが原因だよ」

「アンタ、資料は見なかったのか？」

バпамメレの一言に、竜人である魔区の將軍デルクバレスが投げやりに言う。

魔界の鍛冶師ロッグジェグバ・ドッドの問いに、バпамメレは笑って答えた。

「見ないよ」。読んでもつまんなさそうだったし」

「あらあ、あれはあれで面白かったわよお？大真面目にこんな事を考えてえ、せつせと資料を用意している魔王サマを想像するとお。フッフ」

妖艶な美女姿の淫魔族リーリートウは、ついていた頬杖を解くと魔王を見上げて問いかけた。

「ねえ、魔王サマあ？役を決めるのなら私、勇者のコの夢に現れる女神の役がいいわあ。淫魔族なのだし、夢に現れるのはお手の物よお？」

甘い誘惑で唆すように紅い唇が言の音を紡いだ。

「だ、駄目だ！女神は既にバпамメレに決まってる。リーリートウは魔区外に行つて、一番強くて体力のありそうなやつを探してくれ」

「えゝ、そんなの、つまないわぁ」

「めんどくさい」

「いいから！決まりっ！！」

女性陣から上がったブーイングに怯みそうになりながらも、魔王は言い切った。

「ログジェグバは、勇者の攻撃力を上げる聖剣の製作！デルクは勇者の案内役兼鍛え役な！！」

それぞれの顔を振り向き、役を振っていく魔王にまたもや文句が上がった。

「俺ぁ、聖剣なんぞというもんは造れんぞ」

「オレもめんどいからパス」

「パス！？『も』って何！？みんなやってくれないのっ！？」

テンパる魔王に頷き返す一同。

魔王は縋る思いで宰相に視線を向けた。

「まあ、見返りも無く、くだらない計画に付き合っような者は、この場にはいませんからね」

当然のことだと、魔界の宰相セズシルバスは、言葉にされずとも明らかに伝わる魔王の救難信号をスルーした。

茶会の集い（制限時間は60分） 後編

「あと、34分56秒」

宰相の呟きに背筋を伸ばし、必死といった面持ちで、打開策を練る魔王。

焦点の合わない瞳を机に向けて、じっと俯く魔王ジョセフにリートゥは問いかける。

「ねえ？魔王サマあ、私、女神役ならやってもいいのよお？」

唯一、協力を仄めかすリートゥを見上げ、魔王の瞳が葛藤に揺らめく。

暫しの逡巡の後、やっぱり駄目だと首を横に振った。

「おまえに女神をやらせたら、絶対、勇者を誘惑するだろう！」

「そうねえ、淫魔族たるものお、他人の夢に入ったら、墮とさなきやあダメなのよお？」

「これから鍛え上げて私と戦わせようというのに、色狂いにして墮落させたら戦意も何もないだろう！？」

「あらん、そう言えばそうねえ」

はあ〜と深いため息をつく魔王。

「そつかあ〜。そうよね〜、しょうがないわよねえ。じゃあ、勇者見つけるの、協力してあげようかしらあ？ イイ男探しのついでに、チョット訊くだけだしねえ」

その言葉に、魔王ヴェルディルガはガバリと顔をあげると、感動の涙を流して嗚咽混じりに感謝した。

みつともない魔王に、魔界の宰相セズシルバスは嘆息する。

こんなこと、さほど時間を掛ける事など無いだろうに……。

アザミの花の描かれた白の陶器を眺めやり、その繊細な美しさに、暫し心を落ち着かせる。

カップの内で揺れているのは、淡い蜜色の光を灯すガーネットの様な紅いお茶。

口をつければ、それは既に冷めていた。

一時間は猶予をやって、魔王の好きにさせる気だったが、余りの情けなさに見てられない。

懐中時計を開いて見れば、開始から、36分28秒が過ぎている。

こんなことで過ぎてく時間も惜しかった。

何より、コレに仕えているかと思うと、己のプライド的にも耐えがたい。

セズシルバスは、魔界唯一の鍛冶師であるロツグジェグバ・ドツドに顔を向けると、静かに簡潔に言い放った。

「ドツド、聖剣とはいっても、取り敢えずそれらしい物を作って頂ければかまいません。通常の発注と同じく代金は支払いましょう」

「おう、それなら任しとけ！」

次に、魔区の將軍デルクバレシスに目を向ける。

「デルクバレシス、魔区外には、魔区には無い美味しい料理や珍味があると聞きます。勇者を魔区まで案内する旅の資金は、陛下が出しましょう」

「おつ、そうなのか？それなら協力してやる」

デルクの了解を得ると、バпамメレに視線を移した。

「バпамメレ、協力して下さるのなら、ラタトスク族のジエデクをひと月貸します。好きにして頂いて構いません」

「ホント！？やるっ！」

一分もかけずに協力を取り付けた宰相に、顎を外しているのではないかと疑がわれるような間抜け面で、魔王はぼかんと放心した。

「これでいいでしょう？他に無ければ解散して執務に戻りますよ、陛下」

「あ、ああ」

魔王ジョセフが頷くと、拍子抜けしたように、ログジエグバが椅子の背に凭れた。

「なんだ、これで終わりなのか？誰に何をやらせるか決まっているなら、会議にする必要ないだろうに」

「ホントだよね」

「飯も出ねえしな！」

口々にいうと、皆、席を立って扉に向かう。

彼らが、この茶会の意図を知るのは、その数分後。

それぞれ、逃げていた仕事や相手に、偶然にも、この広大な魔王城の中で遭遇し、向き合わざるを得なくなっただった。

……魔界の宰相セスシルバスが、無駄に付き合う訳がない。

茶会の集い（制限時間は60分） 後編（後書き）

PVせ〜ん!!

なんと、レビューが1000アクセスを越えました！

レビュー、皆さん知ってます？

私、つい最近までよく知らなかったのですが、
（なんとなく、多いと凄いことらしいとは分かってましたよ!!）

ページが捲られた回数の事だそうです！

この私が書いた小説に、飽きずに続きを覗きに来るリピーターさんが居る模様。

浮かれ気分で続きを投稿しちゃいました

因みにこの投稿で1万文字も突破!!

作文苦手だからこんなに書いたの初めてだ。

遊び女の品定め 演じる役者は一枚目？（前書き）

私事になりますが、明日17日、卒論の提出締め切りなんです。

そして、まだ終わってません……。

という訳で、これを読んだ方は、もれなく、私の「卒論提出締め切り前達成」をお祈りくださいね。

因みに、この「品定め」は前に書いておいたストックで、締め切り前の最近、書いていた訳ではないですよ！

遊び女の品定め 演じる役者は一枚目？

商の国サンマルチェッタ。

魔区外にあたる大陸の西側。

その中心にあるサンマルチェッタ国は、整備された交易路で近隣各国と繋がっており、商の国との呼び名に相応しく、商業盛んでどこも人気に溢れていた。

どの街も、行商人や旅人たち、馬や馬車が行き交って、常に活気に満ちている。

それは、夜も深まるこの時間でも変わらない。

歓楽街のとある一軒の酒場でも、何時ものように酔客たちが騒ぎ、だみ声や笑い声で賑わっていた。

店内は、所々に吊るされたランプの明かりで照らされており、煉瓦造りの埃っぽさが酒の匂いに紛れている。

そんな店の片隅で、酒を片手にじっとしている客が一人。

店内だというにも関わらず、外套を着たままフードを目深にかぶっているその客は、フードの奥から静かに、他の客たちを観察する……という訳でもなく、そっと、悩ましげな溜め息を吐いた。

「ふう、どうしようかしらあ？」

野暮ったい灰色をした外套の中で、組んだ足を組みかえる。

白く滑らかな細い足が、チラリと覗くが、ここは一番目立たぬ店の隅。

加えて、テーブルの下であることから、気付いた者は誰もいない。

隅のテーブルの陰気な怪しげフード野郎が、絶世の美女とも言うべき妖艶な女だという事実にも、誰も気が付かないのだ。

一つ手前のテーブルでは、酔った男の集団が、酒樽を抱いて寂しい一人身を嘆いていた。

今夜は、あのコ達の所に行こうかしらあ。

少し前からこの店にいる淫魔族のリーリートウは、酒の杯を少し傾け、舐めるようにちびりと飲んだ。

チヨット訊いてまわるだけで、すぐに終わると思ってたのになあ。

魔王サマから勇者探しを引き受けて三日。

勇者探しは思いもかけず難航していた。

リーリートウが、「強い男を探しているの、知らないかしらあ？」と尋ねると、皆そろって自分だと言い張るのだ。

数人かち合った時に、言い争いから喧嘩に発展していたが、てんで弱くて自己申告はあてにはできない。

仕方が無いので自分で情報収集をしようと、こうして酒場の噂に耳を傾けていたのである。

因みに、リーリートウが「強い人間」ではなく「強い男」と、男限定で探しているのは何も男好きだからではない。

女が弱いと思っている訳でもなく、リーリートウは最初から、男限定で勇者を探していた。

例えば世界一強い人間が女性だったとしても、リーリートウはあくまで男を勇者に選ぶ。

その理由を彼女に問えば、きつとこう答えるだろう。

可愛い女の子に、あの陛下の相手をさせるなんて可哀想じやない。

男好きとは名を馳せながら、彼女の男に対する扱いは、結構酷いものだった。

何気に、慕っているはずの魔王陛下に対する認識の酷さまで露呈されているのは、ご愛敬である。

彼女に悪気は一切なかった。

此所、商の国は周辺各国を繋ぐ道筋が交差し、多くの行商人や旅人があちらこちらから集まっては去っていく中継地ともなっていた。

旅の不安や危険をわずかでも減らすべく、情報交換をする彼らのお陰で、行き交う噂は国の垣根を越えて世界規模だ（魔区を除く）。

世界規模で強い人間（男）を探すなら、此所で情報を得るのが一番良いだろう。

粗い木製テーブルに、頬杖ついて溜め息を吐く。

目の前に掲げた杯は、未だ幾らも減ってはいない。

苦味の残る価格の安い白酒は余り好きではなかったが、普段口にする様な甘い極上の酒なんて、個室も無く噂話が聞こえるような、こんな酒場においてはいいない。

リーリートウは酒場の会話に耳を傾け、また一口と、酒を含んだ。

杯が空になり、店員の女の子に2杯目を頼むと、かわいい笑顔で応じてくれた。

高めに結んだ茶色の癖毛を、可愛く揺らして去っていく。

その背中を見送りつつ、気安く応じた勇者探しの前途多難に、リートゥは幾度目かの溜め息を、深く深く吐くのであった。

遊び女の品定め 演じる役者は二枚目？

届いた2杯目の酒に口付けた時、入口のベルがカランと鳴って、新たな客がやってきた。

現れたのは栗色の髪をしたまだ若々しい青年で、若草色の瞳がさわやかな印象を与える。

均整の取れた体つきをしており、しっかり筋肉もついている。腰には剣を帯びていた。

「よっ！久しぶり」

声もちょっと低めでかっこいい。

リーリトウは、うつとりと彼を見つめると、酒の入った器をテーブルの上に置く。

彼は、先に来ていた仲間たちを見つけ、斜め前のテーブルに着いた。

しばらく、彼を眺めていると仲間の男が気になる事を口にした。

「おまえ、エレミア国の武術大会で優勝したんだって？」

栗色の髪青年が、呆れたように言葉を返す。

「おまえは、相変わらず耳が早いな」

「おっ、認めやがったか。ばゝか、大国エレミアの武術大会で優勝つつたら、そこらのおばちゃんにだって名前が知れてるツつつの」

「よっ！世界一ッ！！」

「あその大会、優勝賞金、いくらだったっけえ？」

「よっしゃ、今日はお前の奢りな！！」

その話題に他の男たちも乗っかって、声を張り上げ盛り上がる。

栗色の髪青年は、苦笑しつつも観念して、今日の酒代を引き受けることを了承していた。

エレミア国と言ったら、この国の北東に位置する大国である。

魔区外にたびたび遊びに来ていたリーリートウも、その大会を知っていた。

むくつけき男たちの集まる祭りと聞いて、何度か見に行った事さえある。

かなり規模の大きな大会で、他国からも人が集まり三日をかけて優勝者を決めていた。

魔王サマの足元どころか宰相のセズシルバスにも届かないであろうが、その大会の優勝者たちは確かに、人間にしては強かった。

あれくらいならあ、魔王サマも満足かもしれないわねえ。

このまま、何日も情報収集が続くかと思われていた矢先、思わぬところで発見した有望株に、リーリートウは目を輝かせる。

その時、店内に短く悲鳴が上がった。

「や、やめてくださいっ!!」

店の中央で、先ほどの店員の女の子が酔っ払いに絡まれているようだった。

「いいじゃねえかよあ、ちっとくらい。減るもんじゃねえだろうが」

そう言って、酔っ払いの男が尚も女の子のお尻に触る。

その腕を、いつの間にも移動したのか、栗色の髪 of 青年が、掴んで止めた。

「嫌がっているでしょう？やめたらどうなんですか？」

「ああ？なんだ、文句でもあんのかあ？手え、放せっ！！」

そういつて男は、青年の腕を振り払って殴りかかる。

青年はそれを軽く避けた。

店内の中央に、荒れそうな雰囲気を感じた客たちが、早々に壁際に避難する。

二人の周囲が開け、こちらからも見やすくなった。

リーリートウは、騒ぎの中心となった、その彼をじっと見つめる。

相手の胸ぐらを掴む太い腕、がっしりとした肩幅、腰にある重そうな太い長剣へと、視線をずらしてじつくりと眺める。

揉み合いで肌蹴た胸板は、思ったよりも逞しかった。

体力ありそうだし、結構強いみたいだし。

「決めたっ。彼にしよう」と

リーリートウは声も軽やかにそつ言つと、勘定を残して、そつと消えた。

遊び女の品定め 演じる役者は二枚目？（後書き）

私事になりますが、卒論の提出締め切りが今日だったんです。

祈ってくれた方、

ありがとうございます！！

無事に締め切りに間に合いました！！

一寸、絶望的だったのですが、
きつと祈ってくれた方のなかに魔法を使える奇特な方が居たのでし
よう。

何はともあれ、皆さんに感謝です。o(^-^o

遊び女の品定め 演じる役者は三枚目？

お茶会から4日目の朝、魔王城に、紅い薔薇の封蝋が押された黒い封筒が届けられる。

特徴的なその手紙はリーリートウからのもので、それは魔王に宛てられていた。

魔王ジョセフが肉を前にした仔犬の如く、目を輝かせてそれに飛びついたのは言うまでもない事かもしれないが、朝に届いたその手紙を、魔王陛下が封切ったのは、夜も遅くの深夜を過ぎて、朝日も昇るつかというそんな時刻だった。

朝、一目でリーリートウからと分かるその手紙を片手に持って、やって来たのは魔界の宰相セズシルバスだった。

傍目にも分かりやすく反応を示した魔王陛下に、彼は言う。

「陛下、リーリートウから今朝、手紙が届いておりましたが」

飛びつく勢いで執務机から駆け寄った魔王陛下に、尚も続ける。

「此処3日程、心此処にあらずといった体で、文字をまともに見る事すらも出来なかった陛下には、手紙を読むなどという高度なテク

ニツクは、もちろん、備わってはいませんよね？仕方が無いので、これは私が預からせて頂きます」

こうして魔王は、人参を目の前に吊るされた馬車馬の如く、働く事になったのである。

4日分の仕事を一昼夜で終わらせたその執念は、常に、仕事に対して発揮して欲しいものだ。

魔界の宰相セズシルバスは、大した期待も込めずに、心の内でぞうばやいた。

手紙の中身は予測の通り、勇者の決定通知とその特徴についてであるらしかった。

人間にしては結構強く、体力がありそうとのことだ。

四六時中、遊び回っている様でいて、リーリートウは昔から、仕事が早くて的確である。

あの4人の中で唯一、まともな仕事ができる者として、宰相の中では印象が良かった。

頼みもしないのに、興奮気味に内容を伝えてくる魔王によれば、

勇者は、エレミア国の武術大会で5回の出場経験があり、毎回上位3位以内に入るつわものらしい。

傭兵を生業にしており、その強さは、魔区外では結構有名なのだそうです。

がっしりとした肩に太い腕をした男で、腰に帯びた太めの長剣を扱っている。

利き手は右だが、左でも剣を振るえるよう鍛えた節があり、無手でもそこそこ戦えるらしい。

魔術の類の素養は無し。

逞しい胸板は好みだが、少々ガニ股なのが頂けない。

茶色の髪に焦げ茶の瞳の31歳、独身男。

と、いった者に勇者は決まったようである。

ガニ股という点において、リーリートウ同様、少々不服を感じたようではあるものの、許容範囲であつたらしい。

魔王は早速、勇者の特徴を伝えんと、ロググジェグバに手紙を書いた。

筆を滑らす魔王ジョセフはきちんと執務机に着いている。

広い執務机の上には、リーリトウからの手紙が開かれたまま、置きっぱなしになっていた。

美しい曲線が特徴的なその文字列は、紛れもなく彼女の筆跡である。

その手紙の最後の方には、追記があった。

P S

勇者探しをしていたらあ、結構好きな爽やか美青年を見つけちゃったの〜。

栗色の髪に若草色の瞳をしていてえ、声をかけたら真っ赤になって照れちゃってえ、すごく可愛いのお。

暫くは彼と楽しみたいからあ、何かあっても呼び出さないでね。

貴方の愛しいリリトウより

親愛なる魔王陛下さまへ
生涯変わらぬ忠誠を込めて

遊び女の品定め 演じる役者は三枚目？（後書き）

「遊び女の品定め 演じる役者は何枚目？」

この副題、作者的には満足の逸品です。

歌舞伎で、「一枚目」は主役、「二枚目」は美男役、「三枚目」は道化役の事なんだそうで、

此処で、「？」の回答を致したいと思います！

問1「遊び女の品定め 演じる役者は主人公？」

A・彼女の探している勇者役はこの物語の主人公ではありません。

問2「遊び女の品定め 演じる役者は美男子？」

A・カッコいい爽やか青年は役者には選ばれませんでした。
勇者役はどうしようもないオッサンです。格好良くはないと思います。

問3「遊び女の品定め 演じる役者は道化役？」

A・勇者役の彼は、とことん、どうしようもないオッサンです。ギヤグ担当にもならない事でしょう。

打診したら「誰かなるかッ！」と怒られそう。

しかし、茶番に付き合わされている様は、ある意味、道化と言えるかも……。

飛び交う剣舞の打ち合わせ 一合

件のお茶会から約三ヶ月、ログジェグバ・ドットは仕上がった剣を手に魔王城を訪れていた。

前回の帰り際には、巨人族のガギヤ・ダラに捉まり散々だった。

他の三人にも『迎え』が来ていた処を見ると、宰相はさぞかし貸しを作れたことだろう。

巨人族のガギヤ・ダラ兄弟には、以前から弟子にしてくれと煩く付き纏われていたが、あんな奴ら、養える訳がない。

何しろ巨人族だけに図体も食欲もハンパ無いのだ。

奴らの暑苦しい性格に付き合うのも苦手だ。

結局奴らを振りきって、家まで帰るのに2週間かった。

ログジェグバは、宰相のように転移などという気の利いた術は使えない。

己の魔力と魂を、金属に練り上げて鍛えるだけだ。

それでも、各街に設置してある転移紋を用いれば、魔王城から家まで三日程で済む。

それが2週間もかかったのだ。

ウンザリもするだろう。

今回も、何かないとは限らない。

布に包まれた作品を、落とさぬようにしっかりと抱え、聞こえてくる足音に耳を傾けながら謁見の間に向かった。

一方その頃、謁見の間では、玉座に座った魔王陛下が、ロググジエグバの到着を、今か今かと待っていた。

知らせが入ったのは五日前。

勇者の剣の漸くの完成に、魔王は浮きたつ心を抑えつつ、そわそわと、入口へと視線を走らす。

「漸く、ようやく、これで計画を進められる!!」

鼻息荒く、興奮している魔王ジョセフに、傍らに控えた宰相は素っ気なくも、そうですかと返しただけだ。

それでも魔王は気にしない。

魔界の鍛冶師ログジェグバ・ドッドの技術は、他の追隨を許さぬ程であり、それにより生み出された魔具は、素晴らしい効果を持つ。

魔区で唯一の鍛冶師であるから、魔区一であるのは言わずもがなだが、魔区外を含めても随一の腕前であると断言できるだろう。

期待に胸を高鳴らせ、傍らの絵本の表紙を見やる。

表紙の絵には、光り輝く剣を掲げ、魔王（……だという黒い怪物）に立ち向かう勇者の姿が描かれていた。

そんな魔王に、物言いたげに、眉をしかめるのは魔界の宰相セズシルバスである。

子供向け絵本を小脇に抱え、暇さえあれば、何度でも読む己が主君。

魔王を退治した勇者の逸話が書かれた本を、期待に満ちた眼差しで見詰める魔王陛下。

どちらも厭だ。

しかし、口に出すのも癢に障り、そのまま黙って控える事にする。

それほど待つことも無く、扉脇に控える兵は、鍛冶師ロツグジエ
グバ・ドットのおとないを告げた。

飛び交う剣舞の打ち合わせ 二合

現れたロッグジェグバに、本を投げ出し、魔王は駆け寄る。

「これか？」

ロッグジェグバの抱える布包みに、早くも目が釘付けである。

「ああ、こいつが、頼まれてた勇者の剣だ」

そう言つて差し出された細長い布包みを、緊張で強張つた手で何とか受け取り、はらりとその布を解く。

「どうだ？なかなかの出来だと思ふんだが」

涼しい顔をした宰相の隣で、魔王ジョセフは絶句した。

その剣は、刀身が緩く湾曲し、鰐元から切つ先にかけて幅広になりながら延びていたが、先を斜めにカットする事で、その鋭さを保っている。

魔王ジョセフが想像していたのは、絵本にあるような真っ直ぐな十字型の剣だった。

基本の形からして、イメージとは全く違うが、これだけだったら、まだ良かった。

問題はその先である。

その刀身は、ギラギラと黄金色に輝き、柄の上部には牛の目玉が埋め込まれていた……。

拳大はあろうかというその目玉は、白く濁ってはいたが、又メ又メとしたその表面が、時折、刀身の黄金を映して煌めく。

そこから伸びる炎を模した彫刻が、鍰の役目を果たしている。

柄は尻尾の裂けた一匹の二頭蛇を擦って固めたもので、柄の両端はビビッドカラーな赤と青が綺麗な螺旋を描いていた。

ふたつ頭の蛇が共有する腹の部分は、派手派手しい紫で、握りやすくなる配慮なのか、ここに捻じれは無く、少々押しつぶしてあった。

柄尻では、首まで捻じれた赤と青の蛇たちが互いを飲まんと噛み合っている。

固まる魔王を満足げに見やり、ログジェグバは解説を始めた。

「注文通り、持つ者の力を上げる光り輝く魔法剣だ！名をエンドヌッデスという。こいつは持つてゐる奴の攻撃力を20倍に底上げし、目玉の粘液には、体力・気力・精力・魔力を増強し、疲労回復や治

癒速度の高速化といった効能がある。戦闘中でも、ちょいと舐めりやあいい。3分と経たずに効果が出るだろう」

髭を剃る時間も惜しかったのか、口髭だけを伸ばしている普段と違って、頬や顎も無精髭に覆われている。

「なにしろ、歴史に残る一芝居だろうからな。ちょいと、腕を張って材料の採集から手掛けてたら二月以上も掛っちまった。どうだ？柄なんか、極上の二頭蛇だろう？イイのがなかなか見つからんくなあ、そいつに出くわすまで一月も山の中歩き回っちまった」

そう言うと、ログジェグバは、照れ臭いのか、痒いのか、ごつごつとした大きめの手で、ガシガシとその鼠色の頭をかいた。

確かに、極上の二頭蛇だ。

二頭蛇は大抵一色のものが多く、色彩が多い程ランクの高いものになる。

質は、その大きさと鱗の艶、発色の良さで決まるが、この柄の蛇ならどれも特上に当て嵌まるだろう。

さらに、尻尾の先まで二つに分かれているものは希少性が高い。

普通の一色二頭蛇の相場と比べて、およそ60倍程の値段がつく。

革製品に加工せずとも、売れば、20人規模の一部族が余裕で一冬暮らせる額だ。

一生をかけて探しても、見つかるかどうかと言ったところの蛇。とてもじゃないが、探した期間が一ヶ月だけとは信じたくない。

見るものが見て、それを聞けば、血涙を流してログジエグバの幸運を呪うことだろう。

思えば、ドッドの造る品の中には、市場には上がらないほどの稀少品素材が使われていることが度々ある。

今までは、腕と勘の良い猟師達にコネでも有るのかと思っていたが、それらも今回のように、自ら採って来ていたと考えられる。

……俄には信じがたいが。

蛇皮には興味が無いから、これについてはどうでもいいが、このままでは価値ある稀少素材の多くが、ドッドの悪趣味に染まる。

早急に何か対策をたてる必要があるだろう。

標準人間型にして、凡そ10000人規模の収容が可能なんだっ

広い謁見の間にいるのは、たった5人。

魔王ヴェルディルガ・ジョセフと宰相ウィーズ・セズシルバス。

鍛冶師ログジェグバ・ドッドと、扉脇の衛兵二人。

暫し、誰もしゃべらず、沈黙が降りる。

日に焼けたログジェグバのその顔は、はにかんでいるのか口元が少し歪んでいた。

それを見た魔王陛下の口元も、文句言い難さにやはり少々歪んでいる。

予想外の懸案事項は出てきたものの、予想通りのこの事態に、宰相セズシルバスは素っ気なくも無反応だった。

扉脇のベテラン衛兵達は、心頭滅却して空気となる事に慣れていた。

魔王陛下の周辺で、奇怪な事は度々起こる。

魔王陛下がここ暫く、何処に行くにも絵本を小脇に抱えていようと、

ロツグジエグバの悪趣味振りに、更に磨きが掛かっていようと、

会話から察せられるに、何故だか知らんが、陛下が芝居を打つ気でも。

更には、あの宰相閣下がそれを黙認されようとも。

兵士二人は、誰に言い触らす訳でもなく、唯、空気となって、其処に佇む。

合言葉は、

「キニシテハイケナイ」

飛び交う剣舞の打ち合わせ 二合（後書き）

大のお気に入り小説が完結してしまいました！
祝うべきか、嘆くべきかという複雑な心境です。
加えて徹夜のお蔭でハイテンション！！

記念と勢いで本日2度目の投稿を果たしました！！

嗚呼、後4個分しか続き書き終わってない……。
私は、思いついた所から書いて置いておくタイプです。
真ん中書いてませんが、終わりの方2個分は、もう書いてしまいました。

更に、最終話の後書きまで既に書き終わっている始末。
なので、私が途中で息絶えない限り、この小説は完結することでしょう。

……どんなに更新速度落ちようとも。
ほんとは、二週間単位で更新するつもりで、これが掲載されるのも、皐月頃のはずだったのに。

ナニこのスピード。

そろそろ、のんびり更新になるかと思われます。
皆様お達者でえ！

〇〇。・（TUT）／

飛び交う剣舞の打ち合わせ 三合

魔界唯一の鍛冶師であり、世界一の腕前を誇るドッドはしかし、センスが悪い。

彼に言わせると、ただシンプルな剣を造るのではつまらず、牛の目玉だとかその辺の怨霊だとかを装飾し、オリジナリティを追求したくなるのだとか。

セズシルバスも多少は剣を嗜んだが、己のセンスとプライドにかけて、ドッドの剣を使った事は一度として無かった。

彼の剣は此れまで幾度も見てきただろうに、どうして魔王はこの事態を想定できないのか。

理解に苦しむ。

取り敢えず、成り行きを眺めていると、覚悟を決めたか魔王ジョセフが口火を切った。

「ロツグジエグバ」

「お、なんだ？ 気に入ったか？」

「……悪いが、これはダメだ」

「は？何故だ？」

魔王は徐に駆け出すと、投げ出していた絵本を拾って戻ってくる。

「コレ！こんな感じのやつが良いんだ！！こんなのを頼む！」

そう言つて、泣く子も黙る存在であるべき魔王ヴェルデイルがは、子供向け絵本の挿絵を指差した。

絵本の勇者が掲げる剣は、全体的に金色で、湾曲のない、十字型のまっすぐな剣だ。

刀身は、太めの両刃となっていた。

柄の上部には青い宝石が嵌め込まれ、金の彫刻で形作られた翼が一对、宝石に沿うようにして円を描いている。

そこから光が放たれているかのように、同じく金色の線が放射状に伸ばされていた。

「・・・そうか、イメージが違ったか。すでに決まったイメージがあるなら早く言え」

「金色」、「太めの刀身」、「柄の上部に嵌められた玉」等と、類似点は多々あるものの、さすがは鍛冶師！

刀剣に対するこだわりには理解があるようで、そう言ったログジェグバは残念そうに、軽く眉尻を下げてはいたが、割とあっさりとした態度だった。

分かってもらえたようでほっとした魔王は、すぐに作ってくるというログジェグバを見送った。

一ヶ月後、ログジェグバが持ってきたのは、原寸大の鷲の剥製の背中から、「まっすぐな」刀身が生えたものだった。

二本の足が布によって巻かれてあり、そこが柄になるようだ。

鷲の翼は左右に大きく開いており、翼の先から翼の先まで、裕に一メートルはあるだろう。

振るう時の空気抵抗が凄そうだと言う以前に、かなり邪魔だ。

「どうだ？これならいいだろう？」

三ヶ月、待ちに待った勇者の剣は、そのオドロドロしい見た目に没になり、更に待つこと一ヶ月にして、目の前に出されたのは鷲の剥製……。

魔力の成長は未だ止まらず、日に日に膨れ上がっていくばかり。

魔王はキレた。

「いい訳ないだろう!? 鷲の剥製引きずる勇者がどこにいる!?!」
「...なんでこんなに悪趣味なんだ!?!」

怒鳴った魔王は、顔を覆って天を仰いだ。

「悪趣味とは何だ! 悪趣味とはッ!?!... 全く、近頃の若いモンと
きたら。少しは芸術に理解を示せ!」

悪趣味という言葉に反応を示し、そうばやいたロググジエグバに、
魔王は呆れた視線を返す。

「ロググジエグバ...。おまえ、自分よりよっぽど年上の、師ラグ
アスにもそう言われていただろう...?」

ラグアスは、ドッドの鍛冶師としての師匠であり、養い親でもある。
る。

師の名前付きで指摘されたその事実には、若干怯んだロググジエグ
バは、少々ムツとしながらも、「すぐに代わりを打ってくる」と、
言い残して帰っていった。

「竜の目玉を飾るなら宝玉にしろ!」

「それでは強度が落ちる！」

「刀身が朱色と漆黒のマーブル模様をした聖剣なんてあり得んだろ
うー！」

「だから、いいんだろうが！ありふれた剣など造ってもつまらん！
！」

その後も幾度か、ドッドの剣の献上とそれに対する魔王の駄目だ
しという応酬は続き、

……二ヶ月後には、魔王ジョセフは、立派なクレーマーと化してい
た。

魔王を補佐する宰相の私としては、もっと別の面での成長をして
頂きたい。

魔王は喚いた。

「いいから！もう、装飾とか付けなくていいから！！シンプルなや
つでいいからっー！！」

涙目で。

こうして、見た目無難な聖剣は、この三日後に、ロドリゲスという名でこの世に誕生した。

ロッグジェグバ・ドッドとしては、手抜きに手抜きし、その効果の程は、向けられる魔法攻撃の無効化のみ。

なんとも、不満の残るこの作品に、ロッグジェグバは銘を入れはしなかった。

後に、人間界で後生大事に残されるこの剣は、女神に授けられし宝剣としてエレミア国の神殿に奉られ、神官の術でその効果範囲を拡張させる事により、戦時の護りにも一役買うのだが……。

魔王討伐を果たし、帰還した勇者に知らされた聖剣の名。

「ロドリゲス」

その名を広めることは、エレミア国王宮と神殿上層部により、頑なにまで憚られ、王国の闇の歴史までも綴る閲覧禁止図書に、ひっそりと書き添えられただけだった。

世には、**【勇者の剣】**としてのみ伝わって、その二つ名を馳せて
いる。

飛び交う剣舞の打ち合わせ 三合（後書き）

初ポイントと初お気に入り登録に浮かれてしまったので。

書いたものって人を表しますよね。

私、単純なんです。

因みに、

魔剣に禍々しいイメージがあるのは、このセンスの悪いログジェ
グバ・ドッドが魔界唯一の刀鍛冶であつたからに他ならない。

と、というのがこの世界での設定です。

次は、お伽噺を投稿します。

ちょっと短めですが、私のお気に入りです。

夢見る羊のお伽噺 第一話（前書き）

777

ユニーク スリーセブン！！

何か縁起いいですね。

この「夢見る羊のお伽噺」は、私のちょっとしたお気に入りです。
座います。

この第一話でオチを察せられる方はいらっしやるでしょうか？

そんなに捻った訳でもなく、さらっと分かっちゃうかもしれない
ですが、此処にそつと挑戦状を置かせてもらいますね。

フフフ（ー＋）

続きの第二話は、二週間後の月曜日7日0時に予約します。

夢見る羊のお伽噺 第一話

パーン族の族長バムメレは、その夜、王からの呼び出しを受けて、王城へとやって来ていた。

何でも、ログゲジエグバが勇者の剣を完成させたのだとか。

あのお茶会があつたのは、約半年前のこと。

もうとつくに、あの話は流れたもんだと思っていたのに、まだ続いていたのかと知らせを受けて軽く驚いた。

正直な話、そんな馬鹿馬鹿しい事に付き合いたくなどなかったが、それでも、王からの呼び出しに応じたのは、宰相の提示したラタトスク族のジエデクの件があるからだ。

ラタトスク族は、魔力を持ったリスの一族である。

もふもふで、ふっかふかな毛並みを持った愛くるしい外見の彼らは、ペットにしたい魔族ナンバー1の人気ぶりで、いつの世も女性たちの心を鷲掴みにしてきたのである。

件のジエデクは赤リスで、その艶やかな赤茶の毛並みを自慢としている。

ラタトスク族の中でも、人一倍、自分の毛並みに気を配っているようで、その艶やかさから推察されるにかなりの触り心地の良さだろう。

……が、自慢の毛並みが乱れるからと、彼は一切誰にも触らせようとしなかった。

そのジエデクを、ひと月、好きにしていという。

前々から憧れを抱いていたバпамメレには、これを断る理由などは微塵も無かった。

お茶会の時と同じ、魔王陛下の応接間。

そのこのソファーに座り、資料を適当に流し読みしたバпамメレは、向かいの魔王に問いかけた。

「それで、このがに股男の夢に入って、」

「が、がに股って言うな！そ、そこは見ない振りをだなっ」

「はい、はい。そんで、このカニ足男に勇者として魔王さまを倒すように言えばいいんでしょう？」

「か、カニ足男……」

魔王ジヨセフの勇者に対する絶対的な幻想は、バпамメレのその

言葉に難なく汚された。

ショックから立ち直れないでいる魔王に代わって、セズシルバスが口を開く。

「はい。そして、その際にはこちらのログゲジェグバの剣を、聖剣と偽り渡してください」

「ああ、これが資料にあつたロドリゲス？うわゝ、普通だゝ。あの人、こんなの造れたんだねゝ」

宰相から渡された剣をまじまじと見やる。

それには、魔区の剣独特の禍々しい装飾は、一切付いていなかった。

「ええ、それが造られるまで5カ月と27日を費やし、計11振りもの剣を、無駄に造る事になりましたが」

宰相セズシルバスとしては全く構わない。それらの支払いはすべて、国家予算とは別の、魔王個人の財布から支払われるのだから。

バ Pam メレはそこでふと、前から考えていた事を口にした。

「ねえ、ジエデクの件なんだけど、これ終わったら明日からすぐにも借りたいの」

「ええ、分かりました。すぐにご用意しましょう」

冷徹で、頭の切れる魔界の宰相セスシルバスは、何も聞かずに了承した。

「それじゃ、とつとと済まして来るね」

その言葉に、今までショックで固まっていた魔王ジョセフが、慌てて復活を果たす。

「い、いいか？女神らしくだぞ！女神らしく！くれぐれも女神らしく頼む！！」

「はい、はい」

「女神らしく」というのが、どんなものかは知らないが、魔王の相手がメンド臭くなったバпамメレは、無責任に適当な返事を返した。

柔らかな布製ソファーに背を預けて、そつと目を瞑る。

今夜の夢は、三十路を過ぎた【かに股男】に魔王退治をするように言っ、勇者にするユメ。

如何にも、メンド臭くてつまらなそうだが、バпамメレは微笑んだ。

ジエデクのもふもふフカフカナ、その触り心地を夢見ながら。

夢見る羊のお伽噺 第一話（後書き）

あれから三日……

結構な人数の方々が、読んでくれたらしいのに、私の置いた挑戦状は未だ放置。

展開予想、するのめされるのめ好きなのに！

受けてたつという、男気ある輩は居らんのかああ！！（泣叫）

因みに、あれからストック増えまして、2・5倍に増量しました。

プラス、終了後の番外編まで3話程。

見たい方いらっしゃいますかね？勇者サイド。

此方は、R15にするか検討中。

（どの程度でアウトなのか判断難しいですね）

5日が経過……焦れてきた。私が！

挑戦状の為に2週間って言ったのに。

誰も拾って受けてくれないから、嘘にしてもう投稿しちゃおうか

と迷い中。

7日にも、続きを投稿すれば、嘘にはなりませんよね！と、唯我
独尊な彼の思考で考えてみる。

うー、どうしよう。

夢見る羊のお伽噺 第二話

魔区外で信仰されているユセアス教の神話は、一応魔区においても知られている。

世界を創ったのは、ユセルアーナスという名の女神で、遠い昔、一人の人間の若者に、その加護を与えて魔王を倒させたのだとか。

普通の人間よりかはよっぽど長寿な魔族だが、真偽の程は定かではなかった。

夢幻郷と呼ばれる空間を足早に渡っていく。

星月夜の煌めく空の中にいるような、この不思議な空間はバパムメレのお気に入りだったが、今は、とっととやる事やって、一刻も早くジエデクに会いたかった。

星のように輝く数多の夢や幻の中から、目的の男の夢を見つける。

バパムメレは角を隠すために、衣装とともに用意されていたヴェールを被ってその中へと飛び込んだ。

くだらない計画を推し進める魔王さまの言う通りにするのは嫌だけれど、やり直しに等ならないよう、ちゃんと女神らしく振舞おう。

そう決意して、姿勢良く、品の良い微笑を湛えたバпамメレが次に居たのは、ほの暗く冷え切った、石造りの部屋の中だった。

男はこちらに背を向けて、ボリボリと背中を掻きつつ、行儀悪く寝っ転がっている。

剥き出しの石壁はかなり汚く汚れていて、部屋には窓もドアもない。

後ろを振り返れば、幾本も並んだ太い鉄柱　鉄格子があった。

投獄された事のない者が見る夢にしては、かなり現実的な再現だ。餓えた臭いまでしてくる気がする。

バпамメレは、周りを見無視して言い放った。

「ジャルダス・テルガン、貴方を勇者に選びます。魔界へ旅立ち、魔王を退治なさい」

男が億劫そうに振り返る。

その焦げ茶の瞳がバпамメレを見つけると、下卑た笑いに口を歪

めた。

「ああ？何だ、ネエチャン、お相手でもしてくれるってかあ？」

バпамメレは、男を無視した。

「私は創世の女神、ユセルアーナス。これは、私の加護を剣の形に具現化させたものです。この聖剣ロドリゲスを持っていれば、悪しき魔物の攻撃魔法は即座に打ち崩される事でしよう」

そういつて、ロドリゲスをふわりと浮かせ、床とは水平の状態
で男の元まで移動させた。

普通なら、こんなことが出来るのは宰相のような風使い位だが、
此処は男の夢の中。

ちよつと魔力を乗せて想像すれば、簡単なものである。

「へえ、これで攻撃魔法が利かねえってか。んな都合のいい剣が
あるかツつうの！まあ、只の剣だったにしろ、こいつは貰つとい
てやるぜ」

夢の中だからか、空に浮く剣を驚く事も無く受け取ったその男は、
徐に立ち上がるとバпамメレの腕をつかんだ。

「で？ネエチャンよあ。人にモノを頼むときゃ、如何するもんか、
モチロン、わかつてるよなあ？」

掴んだ腕に力を込めて、バпамメレを引き寄せる。

男が、にやにやとした嗤いを浮かべながら、その顔を近づけた。

男の生温かい息が顔に吹き掛かり、口臭が鼻に付く。

男の力は存外強く、とてもじゃないが、バпамメレでは振りほどけない。

端から見たら逃げ場もなく、絶体絶命というこの状況下で、彼女はこんなことを考えていた。

魔王を退治するように伝えたく、ロドリゲスも聖剣だと言って女神らしく渡したから、もう、終わりで良いよね。

そう結論付けると、バпамメレは目の前の男の腕を逆に掴み返し、股間に膝蹴りを喰らわせた。

「オジサン、息臭い」

男の急所に強烈な一撃を喰らい、もんどり打って男は倒れる。

彼は声にならない叫びを上げて、床の上に縮こまった。

「それじゃ、私急いでるからもう帰るけど、ちゃんと魔王、退治

に行つてよね」

そう言うと、自称女神は跡形もなく消え去つて、後には、痛みに震える男と聖剣ロドリゲスが、床に転がり残されていた。

数時間後、とある国のとある街に、一人の囚人と看守が居た。

看守は軽いサディストで、囚人は恐喝をして捕まっていたなんともガラの悪い男だが、あと三日もすれば釈放されるはずだった。

ある日の朝、看守が見回りを兼ねて朝飯を持って行くと、牢屋の中には、なんと、蹲る男とともに、長剣が転がっているではないか！

看守は慌てて仲間を呼ぶと、何故か既に顔色が悪い囚人を叩き起し、さっそく尋問を始めた。

「牢獄の中、どうやってこの長剣を入手した？」

囚人は始め、知らぬ存ぜぬの一点張りを突き通し、何も吐こうとしなかった。

しかし、看守は囚人に剣を見せた時の動揺を、見逃すことはしていない。

看守は追及の手を緩めることなく、尋問を続けた。

やがて、囚人は訳の分からぬ陳述を始める。

曰く、自分は女神ユセルアーナスに選ばれた勇者であり、その長剣は女神が授けた聖剣ロドリゲスであるのだと。

ふざけるな！！誰がそんな話を信じるか！

俄然、看守は尋問に燃え、男の拘留期間は伸びたのだった。

夢見る羊のお伽噺 第二話（後書き）

単純なことに気づきました。

予約はしたので嘘にはならないということ。

そして、今日、連載初めて一ヶ月なのですよ。

これはもう、投稿しちゃおうということ。

取調室で尋問を受けていた彼、本文では割とあっさり書いちゃったんですが、その特徴をもうちよい詳しく描写するとですね。

風呂にも入らず牢獄生活だったもので、髪はフケだらけでボサボサ。顔は無精髭に覆われて、歯は黄ばんでいたのです。

そんな囚人の供述が、アレだったわけですよ。

おちよくっているのか、狂い始めたようにしか思えませんよね。

彼、ちゃんと本当のことを話してたのに……。

夢見る羊のお伽噺 第三話

「おい！セズシルバス！冗談やめろ、こっから出せ！」

ババムメレが夢から覚めると、目を開く前に、そんな喚き声が聞こえた。

それに、宰相セズシルバスの声が答える。

「以前から、『王女に振り回されるのはもう沢山だ』『少しの間で良いから、付き人をやめたい』と、仰っていましたよね？」

そつと目を開けば、夢幻郷に渡る前の魔王陛下の応接間。

目の前には、焦がれてやまない、夢にまで見た赤茶の毛並み赤リス、ジェデクがそこに居た。

彼は、格子のケースの中に収められ、テーブルの上に置かれている。

「だからって、なんだよコレ！？ペットか？ペット扱いか！？俺は撫でくり回されるなんて御免だ！」

彼はこちらに背を向けて、宰相セズシルバスに猛抗議を仕掛けている。

セズシルバスはその抗議に、顔色一つ変えることなく、話を続けた。

「貴方は魔王陛下の臣下でしょう。此度、陛下の意向を叶える為にパーン族の族長バпамメレに協力を仰ぎました。その報酬として、彼女には、ひと月、貴方を好きにしたいと確約してあります。ちよつとした特殊任務だとも思ってください」

何を言っても覆りそうのない現状に、赤リスのジェデクは諦めの心境で頂垂れた。

「代わりと言つては何ですが、一年の有給休暇と特別手当を出しましょう」

その言葉に、ちよつとは慰められたのか、赤リス、ジェデクは顔を上げてこちらを振り向く。

黒い、つぶらな瞳と目が合った。

「おい、言つとくけど、俺は撫でられるのが嫌いなんだ！あんまりしつこく撫で回したりしたら、その指噛み千切つてやるからな！！」

先ほどから目を輝かせて、ジェデクを見ていたバпамメレは、興奮のままに、うん、うん、と大きく二回、首を頷かせた。

宰相セズシルバスの転移魔法で、集落へと送ってもらったバпамメレは、家に帰るとケースの中から赤リス、ジェデクを解放した。

バпамメレが夢から覚めたとは言っても、時間はまだまだ夜遅い深夜である。

同じ昼行性でも、先ほどまで眠っていたバпамメレとは違って、ジエデクはかなり眠かった。

そんなジエデクに気が付くと、バпамメレはテーブルの上　　ケ
ー
スから出たジエデクのすぐ傍に、敷物を敷いてくれた。

バпамメレをちょっと見直して、赤リス、ジエデクはその上に横たわる。

バпамメレは何やらごそごそと探していた。

きつと掛け布団だろう。

今は春。自分には暖かな冬毛があるから別に構いはしないのだが、彼女なりの気遣いだろう。

撫で回されるのは嫌いだ、ちょっと位なら我慢してやっても良いかもしれない。

1年もの有給休暇は初めてだった。

そんなに長い期間、休めるものとも思った事もなかった。

休暇中は何をしようか？

久しぶりに故郷の友人を訪ねてみよう。

旅行などにも行ってみたい。

そんなことを思いつつ、赤リス、ジェデクは心地よい睡魔に身を委ねた。

しかし、

彼はその目に見てしまう。

ウトウトと、重たい瞼が閉じる寸前、

星でもなく、月でもない、

不吉な冷たい煌めきを……。

眠ったジェデクを前にして、彼女はうつとりそれを眺めた。

艶やかな赤茶の毛並みは、彼の寝息に合わせてゆっくり上下に揺れている。

彼女はそれに、そつと手を伸ばした。

艶やかでいて、もふもふ、フカフカ、触れば夢見心地なその毛並み。

彼女　バпамメレは、思う存分、その毛を刈った。

剃刀で。

一か月と二週間の後。

彼女のベージュの癖毛には、艶やかな赤茶のファーで出来たボンボンが、髪飾りとして揺れていた。

艶やかでいて、もふもふ、フカフカ、触れば夢見心地なその毛並み。

バпамメレの大のお気に入りとなったそのボンボン飾りは、時には彼女の髪紐となり、また時にはチョーカーとなり、ネクタイとな

り、彼女を彩っていたという。

その艶やかさから、赤茶の毛玉はかなりの触り心地の良さだろう。

彼女お気に入りのボンボン飾りは、それを見かけた女性の心を鷲掴みにした。

……が、自慢の毛質が落ちるからと、彼女は一切誰にも触らせようとしなかった。

結果、ジエデクの毛は、彼の体を離れた後も、撫で練り回される事はなかったのである。

……というのは、既に彼にとってはどうでもいい事実であった。

冬毛のみならず、ひと月後にやっと生えてきた夏毛までをも刈り取られ、丸裸のまま解放された赤リス（…だった）ジエデク。

彼はその後、宰相に与えられたまる一年もの有給休暇を、決して誰とも会わず、遊びもせずに、自らの家に引きこもって泣き過ごしたという。

。「ババムメレ」と「剃刀」

。

それは、彼にとって、悪夢のような現実を想起させる、恐ろしい
単語となって眠れぬ夜を過ごさせた。

夢見る羊のお伽噺 第三話（後書き）

オムニバス形式というと、しっとりとした印象の繊細な恋物語が
思い浮かびます。

……けど、この『2代目勇者の災難』も、実をいうとオムニバス形
式なんですよね。微妙な所だけど。

全然しっとりしていない。

どっちかっていうと、どっしり。ねばって？

「ネバって」は、なんか違うなあ。

「ぼてって」って感じ。

皆さんがどんな印象を持たれているかは謎ですが、マイペースに
のんびりとやって行きたいと思います。

気が向いた時にでもお付き合い下されば光栄です。

お次は、食いしん坊將軍のターンになります。

勇者、本領発揮！！

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の一食（前書き）

ユニーク4桁！！

今日の深夜から今朝に読まれた方が千人目。

今回は、大人気な異世界トリップものですよ。

キーワードに入れてみようかな？

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の一食

魔区外の料理はどれもウマイ！

魔区のもの比べると、肉も魚も柔らかく、些か噛みごたえのない事に戸惑ったが、これはこれで旨かった。

噛めばさっぱりとした肉汁が口の中に広がるのだ。

食材からして、魔区のものとは少し違うようで、四百年生きていて初めて目にする料理もある。

こちらもちちらで地域性があるらしく、酒場や宿屋で噂を聞けば、例え魔区から遠ざかろうと、勇者を連れまわして食いに向かった。

「なあ、俺あ、魔界に行かなきゃならないんだが……」

勇者の男は、バпамメレの【女神のお告げ】を、一応は信じたように、魔区への道から外れると、決まり悪げにそう言ってくる。

宿屋一階の食堂で、骨付き肉をバリバリ食いつつ向かいの勇者を見返した。

出会った当初は、骨まで食うと、ギョツとしていた勇者だが、この半年で慣れたらしい。

約半年前、魔区へと勇者を案内すべく、オレが魔区外まで迎えに行くと、勇者は拘留されていた。

知の国エレジエンクスの東の町セゼガ。

その街の警備隊詰所に隣接された拘置所1階の牢獄に、勇者は居た。

どうやら勇者は恐喝をして、町の警備隊に捕まっていたようだった。

それでも、オレは竜人だ。

生まれながらに宝玉を持つ竜の性質を受け継いで、オレも宝玉を持っていた。

竜の宝玉には力が宿っていて、それぞれで違うが何らかの効果を持っている。

オレの宝玉は見たいものを映す事が出来、これを使って勇者の現状を把握したのである。

まあ、罪を犯したんなら償わないといけねえよな？

本音を言えば、罪だか償いなんかはオレにとっちゃどうでもいいが、そう結論付ける事で、俺は暫しの遊興……否、魔区外探索期間を得る事にした。

暫く、町のそこらの食いモンを片っ端から食い倒し、魔区外料理に舌鼓を打つ。

そして十日を過ぎた頃、町の料理を粗方食いつくしたオレは、次の町に向かわんと、拘置所の壁をぶち壊し、なかなか出て来ない勇者を脱獄させたのである。

勇者は名前を……なんつつたかな。まあ、勇者で良いだろう。

目の前に座る勇者は、だいぶ前に食事を終え、今は麦酒片手につまみを食っている。

因みに、オレの奢りだ……魔王の金だな。

よく解らんが、使命感を発揮したのか勇者が決まり悪げに、そう言えば、

「おまえ、相手は魔王だぞ？今のまんまで勝てると思ってんのかよ？」

と、勇者にはそんな風に言ってやり過すごしてきたのだが……。

「今、何処にいらっしやるんです？」

宰相にバレた。

その日の遅く、2階の宿泊部屋に戻かえって直後のことだった。

窓の隙間から吹き込む風に、宰相の声が聞こえて来たのだ。

そっういや、勇者を連れまわしてもう半年。

勇者が居たのは、大陸東側の魔区から最も遠い西側の知の国ではあつたが、隊を率いるわけでもない気軽に身軽な二人旅。

最短ルートで馬でも使えば、そろそろ魔区に着く頃だ。

……寄り道しなけりやの話だが。

オレは、あの町からの魔区への道筋で、最短東ルートではなく、大回りの南ルートをとっていた。

もちろん、多くの料理、ひいては多くの国に行き合つたためだ。

無論、寄り道だってしまくつていた。

寄り道がバレたとは思ったが、あまり怒らせない為、少々滞在位置を誤魔化して答える。

「あ、あゝ、商の国辺りだ」

この「辺り」というのが重要だ。オレは嘘を言っていない。

相部屋の勇者は既に寝ており、普通の声で話した。

「農の国ファットムロンダの南地区アビンサテラでしょう」

バレていた。

「うッ、知ってるなら聞くなよ」

「とにかく、貴方は、案内をしてくださいね。寄り道などせずに」

こいつの声は、聞いているだけで心臓に悪い。

「わ、わかった。そっち行きやあいいんだろ!？」

「ええ、寄り道はしないでくださいね」

さらに、釘をさす宰相に、了解を告げる事で会話は終わった。

どうやら宰相には、滞在している位置はバレバレだったらしい。

次の日から早々に、魔区へと向かう事にした。

宰相は、オレでもやっぱり恐い。

アレは、……怒らせるべきではないだろう。

しかし、此処は農の国ファットムロンダ。

別名【食の国】とも言われている。

オレは、美味しいもんを食うのが好きだ。

そんなオレは、経費はすべて魔王の金で済ませられるこの旅中に、出来るだけ多くの魔区外料理を食っちまおうと、情報収集を怠ってはいなかった。

此処、ファットムロンダでは、毎年、秋に食の祭りが開かれており、2年に一度、王都では世界中の料理自慢な名コック達が集い、その腕を競い合う【世界料理大会ファットコンテスト】が開催されるのだ。

その開催は一週間後。

『 一週間 』

この街からなら、北に向かえば王都に行けるが、東に進めば次の国へと入れる期間。

オレは悩んだ。

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の一食（後書き）

魔界のデルクさんの人間界旅行。

まあ、異世界トリップ（和訳：旅行）ですよね。ちゃんと。

期待を大きく裏切ること請け合いです。

次回は2月5日の0時頃に投稿します。

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の二食

この半年、何も食ってばかりいた訳じゃない。

オレは勇者の案内役というだけでなく、勇者の鍛え役まで押し付けられていたからだ。

オレは魔区の將軍だ。

もちろん部下も持っている。

オレはしばしば副官を呼びつけては、突然現れた魔物として、勇者に稽古をつけさせていた。

まあ、たったの半年で、魔区でもないのに頻繁に魔物に遭遇したら不自然だから、たったの2回程度だが。

副官には魔法攻撃を中心に、適当に勇者を鍛える様に言っていた。

最後には、やられた振りをするようにと。

勇者はログジェグバの剣の効果に驚喜して、己の強さに自信を持ったようだった。

人の上に立つ上司としては、部下を信じて仕事の一切を任せる事も、重要な仕事の内だと言えよう。

故にオレは、屋台の串焼きや揚げパンなんかを食いつつも、ちゃんと仕事をやっていた。

『とにかく、貴方は、案内をしてくださいな。寄り道などせずに』

宰相からの駄目押しを受け、一晚悩んだオレはある妙案を思い付く。

多少の回り道をして、農の国の王都へ向かい、世界料理大会のみならず一週間開催される食の祭りを思う存分堪能しても、宰相への言い訳が立つ、とびっきりの案である。

オレは早速部下を呼び出し、勇者に稽古をつけさせた。

もし仮に、勇者が移動不可能な程の重傷を負い、瀕死に陥ったとしたら、それは早急な治療が必要とされる事だろう。

オレは、誠に残念ながら、治療魔法の類を一切使えない。

なので、仮に、勇者が重傷を負えば、医者に診せる必要がある。

まあ、怪我したやつを医者に診せてやるのは、人として当然のことだ。

（判断付かない微妙な奴もいるが、魔族だって一応は人である。
俺は竜人だ）

そして、それ程の重傷ならば、こんな小さな町の診療所より、国境近くの村医者よりも、王都のようなデカイ街の医者の方が、たぶん、イイ感じに治すのではないだろうか？

オレは、「突如として現れた魔物」に、ボロボロにされて重傷を負った勇者を引き摺り、王都の医者へと診せるべく、意気揚々と旅立ったのであった。

応急手当を受けることなく、一週間、道中引き摺られて過ごしたズタボロの勇者は、王都の医者に引き渡した頃には、結構ひどい状態だった。

傷は化膿し、脚は腐れて、正に虫の息といった状態だ。

人間は、魔族に比べて寿命が尽きるのが早いというのは知っていたが、症状が悪化するのも早かったようだ。

そんな状態の人間を文字通り引き摺って来た魔界の將軍デルクバ
レシスを、只のしがない町医者、人非人を見る様な目つきで見た。
少々、極まりが悪い心地を感じた魔界の將軍デルクバレシスは、
「オレが見つけた時はその状態だったんだ」と、言い訳にもならな
い言い訳をして、逃げるように祭りの雑踏へと消える。

善良な精神から医者を目指したその町医者は、目の前で苦しんで
いる一人の患者を救うべく、治療を開始し手を尽くした。

（可哀想だが、脚は切り落とすしかないだろう）

苦渋の決断に、その顔を歪ませながら……。

ズタボロの勇者を取り敢えず、王都の医者へと託したオレは、当
初の目的である【世界料理大会ファットコンテスト】の会場へとや
って来ていた。

農の国ファットムロンダの秋祭り【食の祭典】は、世界中から注
目される世界三大祭りの一つに数えられ、中でも2年に一度の頻度

で開催される【世界料理大会ファットコンテスト】は目玉イベントとなっている。

世界中から集まった、腕に自信のある料理人たちが、三日をかけてその料理の腕を競うのだ。

多くの人が見物する為か、野外広場に設定された会場は、一画が特設ステージとなっており、その上で調理や審査が進められていた。

此処に来るまでの大通りも、至る所に屋台が建てられ、あちらこちらの調理台から旨そうな匂いを漂わせていたが、ステージ上の調理台から漂う匂いはそれを軽く上回る勢いで美味そうだ。

今は昼時。ちょうど昼飯の時間である。

ざわつく会場の中、その料理を食べられる時を、まだかまだかと待っていたオレだったが、一向にその時が訪れる事は無く、気付けばその日のコンテストは、もう終了となっていた。

コンテストの品は一般人も審査出来るんじゃないか？

オレは隣の奴に、疑問をぶつけた。

「あゝ、残念だったな。一般人が審査出来るのは初日だけ！今日は二日目だからな」

.....。

そう言うソイツは、.....食ったんだろ。

「残念だったな」と言いつつも、顔がニマニマ笑っている！

オレは無性に腹が立ち、ソイツを噛み碎いてやりたくなったが、
我慢した。

その帰り道、何を食ってもどうにもできない苛立ちを抱えたオレは、ふと目にした調理台の上に骨が転がっているのを発見し、それをガリボリ喰らってやった。

周りに人がいないのは確認済みである。

素知らぬ振りして帰ろうと、歩き出してしばらくの事。

「ギヤアアアアア！.....超珍味！！な幻の魅惑食材、【金の鳥】
がああああああ！.....！」

突然響いたその絶叫に、聞き捨てならない単語があった。

オレは、その絶叫の元へと瞬時に向かった。

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の三食

向かった先では一人の男が地に手を突いて、力無く項垂れていた。
青ざめた顔には絶望が浮かんでいる。

そんな事にはお構いなしに、オレは訊ねた。

「なあ、『超珍味！！な幻の魅惑食材【金の鳥】』ってなんだ？」

男は放心状態で、オレの問いなど聞いちゃいない。

虚ろな目をして一ミリたりとも動かなかった。

代わりに、男の絶叫に集まっていた野次馬の一人がそれに答える。

「アンタ、【金の鳥】を知らないのかい！？金の鳥っていやあ、幻の超高級食材だ。全ての食通の憧れさあね。」

会話を聞いてた野次馬その2が、興奮しながらそれに続いた。

「おう、調理しなけりゃ只の鳥だが、優れた料理人がその腕を振るやあ、如何様にも化けるっちゃう魅惑の珍味【金の鳥】！どんな味覚音痴でも、どんな肥え舌野郎でも、そいつを使った料理を食やあ天にも昇る心地だとか！一生の内で一度でもそいつを食えりゃあ僥

倖よ。あんた、金の鳥がいたいどうしたって言っんだい？」

そいつは、最後に叫んだ男にそう訊いた。

い！
そんなに美味いもんだと言うなら、是非ともオレも食ってみた

未だ死んだ目をした男が口を開くと、野次馬同様、そいつの話にオレも耳を傾けた。

「お、おれは、あのエレミア国の宮廷料理人ベベスさんの弟子で……。商の国のオークションで、金の鳥がたった1羽だけ出品されて……。なんとか、骨だけ競り落としたから、ベベスさんがそいつをスープにする筈だったんだ。あ、明日のファットコンテストが終了したら、会場の客全員に配るつもりで……」

オレは、「骨」という単語に少々嫌な予感がした。

「ベベスさんって、あの有名なベベスさんかい？前回のファットコンテスト優勝者じゃないか！」

「『筈だった』って……。まさか、アンタその【金の鳥】をどこにかしちまったのかい？」

すると、男は更に青ざめカタカタ震えながら呟いた。

「その調理台の上に置いてたのに、ちょっと目を離した隙に無くなって……、うう、おれ、ベベスさんにあわす顔がねえ……」

見ると、先ほど苛立ち紛れに骨をちよろまかした調理台……。

なんてこった！あの骨、只の骨かと思つたら、そんな幻の珍味だったとは！調理されりやあ、絶品料理になるなんて……。ちゃんと仕舞つとけよ！オレ、只の骨のまんまで食つちまつたじゃねえか！明日になればオレも絶品料理で食えたのに！！

オレは、何としても、調理されたら絶品だと言うその幻の【金の鳥】の、『料理』を食いたくなつた。

「よし、オレがその鳥を捕まえてきてやる」

オレは決意も顯わにそう言った。

「は？アンタ話は聞いてたかい？幻の食材だつて言つたる？市場に出回るのなんて、五十年に一度あるかないかなんだ！」

「王侯貴族の連中にあたつて回りや、持ってるやつも居るかもしれんけどよ」

「捕まえるって、そりゃ、無理つてもんだろ？」

「あんた、金の鳥の事だって、今知ったばかりじゃないか！」

野次馬その1と4が口々にそう言ってくるが、オレにとって重要なのは、金の鳥が捕まえられるかどうかじゃない。

何としても、金の鳥料理を食うことだ！！

そう言ってやったら、やつらは尊敬の目でオレを見てきた。

「あんた、漢だ！」

「兄貴って呼ばせてくれ！！」

そんな声を背に受けて、オレは金の鳥を捕まえるべく、猛然と何処かに向かって駆け出した。

因みに、度々都合の良いものしか見えていない魔界の將軍デルクバレシスは気付かなかったが、彼の勢いに吞まれて尊敬の念を抱いたのはたった数人で、その場の大多数の人々は、訳の分からん彼の理屈に呆れた視線を寄越していた。

その数分後、その場にはエレミア国の宮廷料理人であり、ファットコンテストの前回優勝者である噂のベベスさんが現れる。

彼は、幻の珍味を失くした弟子に、軽い調子で言葉をかけた。

「気にするな。骨ぐらい失くなったって、俺の腕にかかりゃあ何のスープも絶品だからな！」

その場の者は皆、彼の度量の広さに感嘆し、デルクの事など忘れるのだった。

農の国ファットムロンダの北にあるタセローグ山。

鳥だって動物だ。動物って言ったら、やっぱり街やか山とかに居るもんだろ。

そんな理屈で、オレは近場の山に来ていた。

早速、『超珍味！！な幻の魅惑食材【金の鳥】』を探し始める。

草木を掻き分け、空を見渡し、一応土も掘ってみた。

途中見つけた蜂の巣を頬張りつつも、蟻の子一匹たりとも逃さぬ集中力で辺りの気配を探り、竜人としての野生の勘を働かせる。

……が、やっぱり全然見つからない。

宝玉を使ってみるか。

オレの宝玉は見たいものを映すことができる。

探し物にはもってこいだ。

オレは胸元に手を突っ込むと、宝玉を取り出した。

宝玉で映し出すとは言っても、宝玉そのものに映って見える訳じゃない。

宝玉を握った俺の脳裏に、見たいものは映るのだ。

【金の鳥】の在りかを視る為に、オレは両の瞼を閉じた。

対象の【金の鳥】について、その特徴を、出来得る限り、思い浮かべる。

ところで、【金の鳥】ってどんなだ？

【金の鳥】を、探し始めて数時間。

日も暮れかけて、辺りが暗くなり始めた頃、オレはちょっとした問題に行き当たった。

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の三食（後書き）

彼、いったい何食、喰う気なんでしょうかね？

後で胸焼け起こすの私なのに。

進行具合ですが、とうとう最終話に手をつけてしまいました！

けれどもやっぱり、まだ中間書いてない。

携帯で見た時のレイアウト。ここしばらく、ほわほわとした、茶色トーンになっておりました。

あれ、実はバプムメレのイメージカラーで御座います。

（アンバー、バートアンバー、オフホワイトで構成されていたのです）

読み難かった様なので、初期設定に戻しましたよ。

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の四食

『探し物にはうつてつけ』なオレの宝玉であるが、目下の重要事項である「【金の鳥】探し」において、その能力は全くの役立たずである事が発覚した。

オレの宝玉は、オレが見た事の無いものを探すときには、その使用に条件が付く。

対象の外見的特徴を3つ、オレが思い浮かべられなければならないのだ。

オレが金の鳥について知っている外見的特徴は2つ。

「鳥」である事と、たぶん「金色」であることだ。

オレは、宝玉で見つける事を諦めた。

どっちかというと夜行性で、暗闇でも余裕で周りが見えるオレは、それでも諦めずに、山の中を一晚探し続ける。

草木を焼き払い、空を睨んで、一応土にも潜ってみた。

途中見つけた二頭蛇を頬張りつつも、蟻の子一匹たりとも逃さぬ
集中力で辺りの気配を探り、竜人としての野生の勘を働かせる。

……が、金色の鳥など全くと言っていい程見つからなかった。

オレを嘲るかのように、金色の朝日が眩しく輝く。

むかついたオレは、天に向かって炎の息吹を噴き上げた。

そして、オレが諦めかけた頃、視界の端に見た事のある鼠色がチ
ラついた……朝日には無い金色も！

ガバツとそちらに顔を向ける。

前に居るのは見た事のある鼠色頭。

そいつが、持っていたのはッ

「　　っ！おつまえ！！ナニ持ってたんだよ！？」

目の前を歩くログジェグバが持っていたのは、正に、探し求め
ていた金の鳥！！

オレは叫ぶとログジェグバの元へと駆けた。

「ああ、これか？こいつはついさっきイキナリ空から降って来たんだ。丁度、武具の素材集めをしていた所だな。どうだ？この金ピカ具合なんか結構良さそうだろう？」

そう言つて、ロツグジエグバは金の鳥を掴んだ右手を持ち上げた。掴まれた鳥の足は、少々焦げて欠けている。

クソツ！勿体ない！欠けてなけりゃあ、もっと食い分増えただろうに！！

暫く、『超珍味！！な幻の魅惑食材【金の鳥】』を凝視していたオレだったが、その言葉の意味するところに気が付くと、肝を冷やして絶句した。

信じられないっ！！

『超珍味！！な幻の魅惑食材【金の鳥】』を、武具の材料にするだっ！？

オレはなんとか気を取り戻すと、ロツグジエグバ相手に交渉を試みた。

「ロツグジエグバ、悪いがそれは、オレにくれ」

「ん？何故だ？オレはこいつで鎧を造ってみたいんだが」

やばいな、ログジェグバの奴、金の鳥が何かも知らないで武器にする気満々だ。

金の鳥が五十年に一度、市場に出るか出ないかという幻の高級食材だと教えれば、ログジェグバも鎧なんかにはなくなるかもしれないが、それだと確実に取り分が減る！！

オレは焦った。

なんとか、ログジェグバに金の鳥の価値を知らせず、コイツの魔の手から魅惑食材を救出してやらなければならない。

未だ存命中でログジェグバに足を掴まれ、逃げる事の出来ない鳥は、憐憫を誘えそうな音で一声、ケルーと鳴いた。

「……ログジェグバ。実は、勇者の事なんだが……」

オレは、顔を見られれば見破られるかもしれないという懸念と、少々の疾しさから、ログジェグバから顔を逸らして続けて言った。

「あいつ、オレがちよっと目を離れた隙に大怪我を負っちゃって……、それで、なんか滋養の付くもんを食わせてやりたいんだ」

前半部分は、別に嘘ではない……が、勇者に珍味を食わせるつもりは微塵も無かった。

「……そうか、わかった。こいつは持っていけ」

ログジェグバは神妙な面持ちで一つ頷くと、あっさり珍味を渡してくれた。

「勇者の男はそんなに酷い怪我なのか？何なら、こいつも持っていくと良い」

そう言つて、ログジェグバはきっちり封のされている小瓶をひとつ投げて寄越した。

「なんだ？薬か？」

「ああ。エンドヌツデスの目玉粘液と、ケルゲエスジャラの脾臓なんかを混ぜたやつだ。とりあえず、怪我に良い」

「ふーん。そうか、まあ、もらっとくわ。ありがとな」

オレは小瓶を懐にしまうと、金色の鳥を片手に意気揚々と下山した。

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の四食（後書き）

これで、デルク編終わりな訳ではありません。
ここで終わったら不自然ですものね。
食いしん坊將軍まだ食う気です！

朝・昼・晩とおやつで四食。

五食というと、
あれか？夜食か！？

太るぞデルク！
でも憎いことにこのデルク、太らないんですよ。
ドラゴンって多分、胃もデカいんだろうなあ。そして、消費も
半端ないんでしょう。きっと。

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の五食（前書き）

成績通知が届き、無事に卒業出来る事が判明いたしました！

嬉しさ余って、投稿します。

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の五食

「 コッ、コレは！-！ 」

昨日の男を宝玉で見つけ、捕まえてきた【金の鳥】を見せると、その隣の男が目を見開いて大声を上げた。

「 であッ、伝説の【黄金の鳥】！？ 」

なんと、オレが捕って来た金色の鳥は、100年に一度、人々の目に触れるか触れないかという伝説級の代物だったらしい。

オレが捕って来た金色の鳥は、その全身が黄金で出来ているかのようには輝きまくっており、【金の鳥】の内でも別格にあたる最上級のモノであつたらしいのだ。

普通の【金の鳥】というのは、金に見えない事も無いという程度の茶色の鳥で、一部にでも金色が混じれば上物なのだそうだ。

そうか、魔王の髪色って『上物な金の鳥色』だったのか。……喰ったらそこそこ、美味いだろっか？

昨日の男の隣の男は、あの時、話に上った前回優勝者であった。

オレが当然として「やる」と言ったら、恐縮されて拒否られた。

こいつら馬鹿か？オレじゃ調理出来ねえだろうが！

その旨を伝えて、オレは断固として【黄金の鳥】をそいつ等に押し付ける。

コンテスト終了後、絶品料理の無料配布は予定通りに行われ、配布前に【黄金の鳥】提供者として紹介されたオレは、街中の人間から神の如く崇めたてられた。

そして捧げられた数々の料理はどれも美味しく、オレは最高の一日を送るのだった。

……【黄金の鳥】の肉入りスープ。アレは、言葉には出来ねえ……。

まだ、明日もある。

そう思ったオレは、深夜を回る前に宴を切り上げ、宿へと帰った。

帰り道に、懐の薬の事を思い出したオレは、ちよっくら医者宅に忍び込んで、寝ている勇者に飲ませてやった。

医者も勇者も、もちろん、起こしてなどいない。

何しろオレは、將軍だからな。

住人を起こさず他人の家に侵入するなどお手のものである。

まあ、一応夜遅くだからな。オレなりの気遣いだ。

その夜、【農の国】の王都、某町医者の診療所兼自宅から、男二人分の絶叫が響き渡った。

何事かと起き出してきた近隣の住人達は、診療所のベットの傍で絶叫しながら尻餅つきつつ後退している町医者と、ベットの上で絶叫しながら、筋肉だとか血管やらを、左の腿の辺りから、うねうね伸ばす魔物を見た。

【黄金の鳥】の宴で盛り上がり、同一の信仰対象を得た事により、凄まじい程に結束力を高めた住人らは、言うまでも無く、王都総出で魔物を撃退したのであった。

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の六食（前書き）

六食目。

1日で六食っていうと何ありますかね？

朝食、昼食、夕食、夜食、おやつ

……で、五食とすると、あとひとつ。

「おめざ」でしょうか？

知ってます？おめざ。

私は、テレビ番組で知りました。

江戸時代辺り、裕福な家庭の子の寝起きが悪かったりすると、口に菓子を取り込んで起こしたそうです。

頭に糖分という栄養がまわって、ちゃんと起きられるそうですよ！
低血圧の方は是非お試しください。

しかし、そんなに食うと、太ること確実なので、金平糖位が丁度良いんじゃないでしょうか？

私は、気にせずマドレーヌとか食っちゃいますけど（笑）

私の体型はご想像にお任せします。

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の六食

その日の遅く、2階の宿泊部屋に戻って直後のことだった。

「今、何処にいらっしゃるんです？」

窓の隙間から吹き込む風に、宰相の声が聞こえて来た。

多少ビビったが、今回はちゃんと大義名分を用意している。

オレは堂々と答えてやった。

「ああ、農の国の王都だ。勇者の奴が大怪我負っちゃったからな。ちゃんとした医者に診せんのに仕方なく、ちよつとこつちまで来る事にしたんだ」

オレの大義名分に、宰相は即座に言葉を切り返した。

「通常、重傷者は一刻も早く、近場の医者に診せるべきでは？現在、農の国ファットムロンダでは、【食の祭典】が開かれる時期ですが、それに行きたいが為に、貴方が勇者に怪我を負わせて王都まで引き摺って行ったのは、分かっているんですよ？」

バレていた。

どうやら宰相には、滞在している位置だけでなく、その細かな行動や、オレの意図までバレバレだったらしい。

魔界の將軍デルクバレシスは、何でも見通す魔界の宰相セズシルバスに、これまで以上の恐ろしさを感じた。

しかし、何の事は無い。

彼の信頼する副官が、いつも仕事を押し付けられる腹いせに密告をしたのである。

そんなことを知る由も無かった魔界の將軍デルクバレシスは、次の日から早々に、勇者を伴い魔区へと向かったのだった。

医者宅では無く、何故か王都の外れで見つけた勇者は、なんぼかマシだがまだまだ怪我だらけである。

ログジェグバの怪しげな薬は、あまり役には立たないようだ。

まっすぐ向かえば、5か月ほどで魔区に接するガレスト国に着いた。

今は、ガレスト最東端の街バジクジェンクスで宿をとっている。

ランプの灯る室内で、一応それらしく荷物の確認をした。

明朝に出て馬を使い、明後日には魔区へと入ることが出来るだろう。

その旨を勇者に告げると、ランプの加減が勇者の瞳が揺らめいた。

「……なあ、やっぱり、魔界に行くのはまた今度にしないか？」

「は？」

思わぬ言葉に聞き返す。

「や、だって、魔王つつたら、やっぱり強えーだろ？俺なんか勝てるワケねえじゃねえか」

いや、それこそ無えから！魔王の方が負ける気満々だからな。

思わず出そうになった言葉を押しとどめる。

チッ、めんどくせーな。怖気づきやがった！

舌打ちしそうになるのを内心で押しとどめて、なんとか宥める。

「大丈夫だって！お前、ここ一年で強くなっただろ？」

正確にはまだ1年も経ってはいないが、大体、勇者と会って1年位だ。

この1年、オレは自分の副官に勇者の稽古をつけさせていた。

オレはそれを見てはいないが、たぶんちょっとは強くなっただろう。

しばらく励ましてやっていたが、反応はいまいちで、その日は無理やり切り上げ寝る事にする。

次の日、勇者はいなかった。

オレの宝玉は見たいものを映す事が出来、失せ物探しにうつてつけど。

勇者はすぐに見つかった。

まだこの街にいるらしい。

食いモン片手に、なにやら、悩んでいるらしかった。

ちよつくら、自信をつけてやるとするか。

勇者の自信喪失に、少し、心当たりがあつた魔界の將軍デルクバレシスは、街を駆け、森に紛れて変異した。

赤色の鱗をもった巨大な火竜となったオレは、街へと飛んで少々暴れる。

街は一瞬にして恐慌状態に陥り、逃げ惑う人間や怯え狂う馬などの動物でごった返した。

「ごちゃごちゃと蟻のように兵士たちが湧き出てきては、矢を放ち槍を突き出し五月蠅く纏わりついてくる。」

背中の翼で少し強めに羽ばたくと、ソレは起こった風で簡単に吹き飛ばされていた。

「オイオイ、この街大丈夫かよ！まあ、オレには関係無いからどうでもいいがな。」

騒ぎの中で見つけた勇者は、オレに背を向け、こけつまろびつ逃げていた。

普通の火炎も吹けるオレだが、此处は態と魔法の火炎を吹きつける。

勇者を狙った火炎魔法は、ログジェグバの剣の効果で消え失せた。

その事に気づいた勇者は、若干迷ったようではあったが、あらぬ方へと駆けだすと、オレの背後に回って剣を振るう。

オレは態と、それをその身に喰らってやった。

突如街を襲い、火を吹く竜を、勇者は見事撃退する。

街の兵士や將軍さえも、太刀打ち出来ない巨大な竜を相手取り、深手を負わせて追い払った勇者を、街の人間は次々に褒めそやした。

勇者の自信も随分回復したようだ。

まったく、魔王並みに単純な奴だな。

己の魔力で瞬く間に怪我を治した魔界の將軍デルクバレスは、何食わぬ顔で群衆から姿を現すと、勇者を魔城へ導いた。

満腹竜の息吹は何処？ グルメを廻る旅の六食（後書き）

此処でちょっとご報告。

「ストックが切れました。」

最終話辺りならあるけど、続きは書かなきゃ在りません。

そして、お気付きの方もいらっしゃるかと思いますが、私、今を
ときめく就活生なのであります。

ウフフ。

この春卒業です。

まだ決まっておりますん。

なので、続きは落ち着いてから、という事になります。

（我慢できなくて書きちゃうかもだけど）

続き、早く読みたいな。

と思われた方は、
ついでに、

ごんたろうが早く良いトコに就職するよう、お祈りください。

因みに、此処で言う『良いトコ』というのは、ごんたろうに合う

処といった意味でございます。

ではでは、暫く『2代目勇者の災難』は更新できませんが、皆様お達者で〜

(^o^)/

うおう、忘れるところだった！

私が投稿しているリレー企画『続きを書きましょう』の更新は続けてまいりますよ！

私、コピーと貼り付けするだけなのです。

そして、こちらの更新暫くできないとか言つといて、ちよくちよく私を見かけるかもですが、多目に見てやってくださいな。

ではでは。

栄華に生きる偉大なる歩み 其の一步（前書き）

ご無沙汰してます。

地震続きですけど、皆さん、大丈夫でしょうか？

私の方は、なんかもう、地震に慣れてしまいました。

十年くらい前から、ちよくちよく来てましたしね、地震。

今じゃ、日課のように訪れるのだもの。

そりゃ、慣れちゃうってものよ。

私、神経図太いから良いけども、繊細な人は眠れなくなるから心配です。

早く、落ち着くと良いなあ。

栄華に生きる偉大なる歩み 其の一步

一般人には見慣れない不可思議なものでごった返したその一室は、いつ何時も、何やら不気味な雰囲気を漂わせている。

まともな感覚を持つ常人なら遠巻きに扉を眺める程度のその一室。

しかし、その部屋はある種の者達にとっては輝けるユートピア。

夢を現実とする、誇るべき作品の詰まった、素晴らしき我城なのである。

今、その城……もとい一室では、縫れた白衣を身に纏い、目の下に真っ黒な隈を作った者たちが、一画に集まって密やかな笑いを交わし合っていた。

「部長！遂にやりましたね！！」

「ああ、これで……、此れで！！少ない研究費で遣り繰りしていく苦悩とはおさらばだ！！！！」

高らかに発せられたその声音は、魔王城理科学研究部、部長のものである。

その顔は、晴れやかに笑っている……のだろうと、長年、同じ研

究者として共に歩んできた仲間達には分かっていた。

例え、笑みを形作るその眼の下に、色濃い疲れが現われていても。

例え、笑みを形作るその口元が、蓄積された疲労によって、引き攣り気味であろうとも。

彼らには分かっていた。

アレは、晴れやかに笑っているのだと。

当然である。

何十年という月日を、同じような顔をして共に笑い、共に泣いてきたのだから。

分からない訳が無い。

此処は、魔王城、理化学研究部、研究所。

一般人には見慣れない不可思議なものであった返したその一室は、いつ何時も、何やら不気味な雰囲気漂わせていた。

まともな感覚を持つ常人なら遠巻きに扉を眺める程度のその一室。

しかし、その部屋はある種の者達にとっては輝けるユートピア。

夢を現実とする、誇るべき作品の詰まった、素晴らしき我城なのである。

今、その城……もとい研究所に居るのは、縋れた白衣を身に纏い、目の下に真つ黒な隈を作った研究者たち。

彼らは、密かに推し進めていたとある研究開発が成功した事を喜び、部屋の隅で囁き合っていたのである。

もつとも、囁き声であつたのは最初の内だけであり、もう既に、『声高に』と表現しても過言ではない程の音量になつてはいたのだが……。

まあ、気にする事は無いのだろう。

まともな感覚を持つ常人は、近寄ろうとさえしないのだから……。

研究部員たちは、虚ろな目をして笑い合う。

見た目とは裏腹に、心の内は晴れやかに。

中でも部長は、長年の悩みからの解放と、心血注いで開発してきたとある装置の完成に、湧き出る歡喜を抑えきれないようであつた。

ふはは、ハハ、ハアーハッハッハッハッハ！！！！

魔王城理科学研究部研究所に、研究部部長の笑い声が響き渡る。

研究部員のアルウス・テーナは、同じ研究所に所属する身として、その、ちよつと他人の振りをしたい部長に言葉をかけた。

「あの、部長。なんかその高笑い、悪役みたいなんでやめてください」

引き攣り顔の部下の苦言も、今の彼には通じなかった。

ハアーハッハッハッハッハ！！！！

魔王城理科学研究部研究所に、研究部部長の笑い声が響き渡る。

目の下には黒い隈。草臥れた白衣。ぼさぼさの髪。

ハアーハッハッハッハッハ！！！！

血走った眼。臭う白衣。顔に張り付くピンクの髪。

ハアーハッハッハッハッハッハ！！！！！！

今の彼こそ、マッドサイエンティストと呼ぶに相応しい。

彼は腰に手を当て高笑う。

片足で、自身の椅子を踏みつけて。

「ハアーハッハッハッハ！！！！遂に、遂にこの私の偉大なる研究が」

魔王城理科学研究部研究所には、研究部部長の高笑いがいつまでも響き渡る……かに思えたが、同じ研究部に所属する研究部員、アルワス・テーナによってその笑い声には終止符が打たれた。

ゴツツという鈍い音を最後に、騒がしかった研究所には『惨劇の後』という名の沈黙が訪れたのである……。

栄華に生きる偉大なる歩み 其の一步（後書き）

『この小説は2ヶ月以上更新されていません』

っていうアレ、あまり付けたくないのです。

付けないように頑張りますね！

栄華に生きる偉大なる歩み 其の二歩（前書き）

10000pv突破しました><

御贔屓にしてください、ありがとうございます。

（*^|^*）

突破したその日に「裏設定的な落書き」をアップいたしました……
が、あれは突発的に上げてしまったもので、その内消しちゃうかもしれない。

（逆に増えてるという事もあるかもしれませんが）

なんかね、記念的な節目になると、何かやりたくなっちゃうのですよ。

正月とか誕生日とかエイプリルフールなんかのイベント事が大好きなのです。

私、絵を描くのも趣味なのですが、コイツを絵で見てみたいってキヤラ、いますかね？

因みに、私が今一番描いてみたいキャラは部長だったりします。

（ー*）

栄華に生きる偉大なる歩み 其の二歩

ここは、魔王城理化学研究部、研究所。

一般人には見慣れないだろう実験器具や発明品で満たされたこの部屋は今、身に染みる様な沈黙に包まれている。

別に、無人という訳ではない。

今、研究所には総勢十三名の関係職員達が一堂に会している。

全員が全員、無口という訳でもない。

では何故、この場がこんなにも静けさに満ちているのか。

……疑問の答えも此処にある。

床に広がる赤い液体。

ぼさぼさ髪のピンク頭を血に染めて……、

魔王城理化学研究部部长が、うつ伏せになって倒れていた……。

一研究職員であるアルウス・テーナは、目の前の魔王城理化学研

究部部長のピンク頭を感情の籠もらない目で見降ろす。

彼女の右手には凶器となったタイリクオオウミガメが、甲羅に首を引っ込めて、その場をやり過ごそうとじっとしていた。

研究所のマスコットであるタイリクオオウミガメのリクちゃんは、体重30kgの巨漢を引き摺りのたくた歩く、亀のような不思議生物である。

その身体は堅い甲羅に覆われて、前足は陸亀のそれ、後ろ足は海亀のような形態をしていた。

無論、これで殴られたらひとたまりも無い。

勿論、それで殴られた魔王城理化学研究部部長は……、瀕死の重傷である。

しかし、この場に彼を気遣う者は皆無であった。

気を遣うべきは、この場の空気。

そして、彼女の動向だ！

大切なのは自分の命！

そんな訳で、この場はこんなにも薄ら寒い緊張と沈黙に包まれて

いたのである。

暫しの沈黙の後。

周囲の注目を一身に受けていたアルウス・テーナは、足元にまで届いた血だまりをぴちゃんと跳ねさせると、タイリクオオウミガメのリクちゃんを、そつと床に下ろした。

そして、無表情を一変、いつも通りのあどけない苦笑で顔を上げ、いつも通りの明るい口調で言葉を放つ。

「まったくもう、幾ら待ち望んだ装置を完成させたからって、はしやぎ過ぎですよ？部長」

彼女はそう言って、既に意識の無い部長へと語りかけ、その腕を驚掴んだ。

「部長もいい大人なんですから、恥ずかしい事しないでくださいよね！」

彼女は尚も語りかけ、長身の部長を無造作に肩に背負うと、ぴちやり、ぴちやりと血溜まりの上を進む。

研究室の外へと繋がるドアに向かって歩き始めた彼女は、クルリと皆を振り返ると、そばかすの浮かんだ顔でにこりと笑んだ。

「ちょっと、医務室に行ってきますね。皆も徹夜続きで疲れたでし

よう？休憩にしましょう。仮眠でも取っていてください」

優しさ溢れる気遣いに、心とむ者は居なかった。

何よりも、そばかすと共に顔に散った返り血が、恐ろしくて仕方がない。

故に、「頭を打った意識不明の重体者をむやみに動かすのは危険だ」と、彼女に教える者も居なかった……。

背負った部長の足をズリズリと引き摺り、研究室を出たテーナは医務室へと向かった。

長く仄暗い回廊を渡りながら、自分の顔のすぐ横にある部長の充血した白目を見て、ふう、と軽く息を吐きだした。

さっきは、部長のあまりにもな浮かれっぷりを見て、思わず殴ってしまったが、部長の気持ちに分からないという訳ではない。

やっと、完成したのだ。

此処数十年の苦悩がやっと報われる。

その興奮と解放感が部長の理性と羞恥心を吹っ飛ばしたのだとしても、仕方がないのかもしれない。

何が悲しくて、あの歳になってあんな高笑いをしたのかは、テナには到底理解できぬ事ではあったが、そう、無理にでも理由を付けて納得する事にした。

魔王城理化学研究部研究所は、その名の通り、魔王城内で設立・管轄された研究機関である。

主に、魔力やその活用に関わる研究開発を行っているが、物理学や生物学、化学や工学など多岐にわたる分野で多くの実績を上げていた。

研究テーマは、国から否応なく押し付けられる事もあるが、基本は研究職員の自由にできる。研究職員は12人。それぞれ得意分野が異なり、各々で研究テーマを持ってはいるが、ここ近年、研究部員全員が結束して取り組む、あるひとつのテーマがあった。

『科学技術による魔力生産方法の発明』である。

これまで、魔力が物に宿る仕組みや、自然的に魔力が発生するまでのメカニズムは、長い間謎とされ、多くの研究者たちが挑んだテーマであった。

それが、約50年前、かなり有力な説が発表された事によって、魔法化学会を席卷したのである。

もちろん様々な論議が巻き起こり、否定的な論説が呈される事もしばしばだったが、否定をされることにそれを覆し、その説は信憑性を高めていったのである。

その説は、我が魔王城理化学研究部でも専らの話題になり、何時しかこの説を基に人為的に魔力を造り出そうという試みに繋がったのであった。

成功すれば一大発明である。

「私の地位と名声は鰻登り間違いなし！私は歴史にその名を刻まれ、全世界の凡人に仰がれ敬われるのだ！！」

と、例の如く高笑いを始めた部長を中心に魔王城理化学研究部では、魔力生産方法の確立を目指す事となったのである。

人為的に魔力を造り出すというテーマは、探究心溢れる研究職員達にとっても魅力的なテーマであったのだった。

先ほど完成した装置は、この研究を進めるにあたって無くてはならないものだった。

長年の研究過程を思い返し、感慨に耽りながらテーマは歩を進めていた。

広大な魔王城の地下2階にある研究所に対して、医務室は地上2階にある。

女性がたった一人で大の男を背負って運ぶには長すぎる距離だ。

けれどもテーナは、そんなことをチラとも意に介さずに、平然として階段さえ昇ってしまふ。

地上の階に出れば、そこは地下とは違って格段に人通りが多い。

通りかかる人々は、大の男を平然と背負い、血に染まった少女を目に留めては、顔を引き攣らせて目を逸らした。

そして、後に残された引き摺ったような血の痕跡を目にしては、空恐ろしさに身を振るわせるのであった。

栄華に生きる偉大なる歩み 其の三歩

研究に、犠牲は付き物である。

研究には、膨大な資金と、時間と、労力が必要。

その資金と労力を工面し、知識を集め、試みを行使する事に時間を費やす研究者は、己が手掛ける研究に人生を捧げていると言っても過言ではない。

何者も生きる上で糧を必要とし何かを犠牲にして生きてはいるが、日常的なその犠牲を一々【犠牲】と認識する事はあまりない。

私は、研究職というものの程、【犠牲】というものと向き合い続ける職業はないと思っている。

家族や友人と過ごす時間を犠牲にし、自らの家財を犠牲にし、研究対象や実験動物の生命と自由を犠牲にする。

時にはその全てが無駄になるという事もまま珍しい事ではないが、それを認知しながらも、【犠牲】を意識しながらも、それを支払い続けるのだ。

その【犠牲】がなければ、如何な研究も成し遂げる事は出来ないのである。

生涯を賭して自らの信念を貫くその生き方を、

その、覚悟を秘めた眼差しを、

私は美しいと思い、惚れたのだった。

医務室に辿り着き、ガチャリとその扉を開く。

中を覗くが、医務員は居ない。

部屋の中は、仕切りこそ無いがその役割ごとになんともなく空間が分かれている。

手前には応接室兼待合室といった風情にソファが並び、右奥には診察の為の作業机と椅子と機具、左奥には患者を寝かせる為のベッドが十数並んでいた。

アルウス・テーナは迷う事無くベッドに向かうと、背負った部長を放り投げた。

畳まれていた掛け布団を掛けてやり、溜め息を吐きたい気持ちで部長を睨む。

まったく、こんなに献身的に尽くしてやっているとこのくに、いつになったら部長は私の気持ちに気づくのか。

私の悶々とした想いも知らぬ氣に、部長は白目を剥いて眠っている。

まったく、暢気なものだ。

電圧装置にでも繋いで、どこまで耐えられるか、試してやりたくなる。

テーナの心の声が聞こえた訳でもあるまいに、その時、部長の身体はぶるりと震えたのだった。

テーナは部長を眺めながら、ベット脇の椅子に腰かけた。

開いた白目を閉じてやれば、その寝顔は至極まともで、先程まで莫迦笑いをしていた人物の物とはとても思えない。

ホントに、何でこんな人を好きになっちゃったのか。

部長の事を知れば知る程、分からなくなってくる。

けれど、知れば知る程に深みに嵌まってしまっている様なのは、気のせいでは無いのに違いない。

もつと、もつと、と彼の全てが知りたくなってくるのだから。

……恋と研究は、とても似ている。

そんな事を考えながら、テーナは手近な布で、血だらけになった部長の顔や頭を拭っていたのだが、そんなテーナを目撃した隣のベツトに伏せる患者は、己が身体を戦慄させた。

彼女の手にするその布は、いつから其処にあるとも知れない台布巾であつたから……。

余談であるが、隣の患者はよくサボりに寝に来る常連であり、彼女らの訪れた医務室の担当医務員が結構な無精者で、台布巾の事など歯牙にもかけない性格なのを知っていたのだった。

しかし、テーナにはそんな事は知る由も無く、また、知っていたとしても気にすることなく部長の顔を拭っていただろう。

何週間も着たきりであつた白衣で、顔を拭う事もざらな彼女らにとつては、今更な問題なのである。

研究者というものは、研究に関わる事のない日常の事物において、時に恐ろしい程無頓着であり、また、目的の為ならば手段を問わない彼女らは、用が成せばそれでいいのであつた。

テーナは、ガビガビに乾いた布で、部長の顔にこびり付いた血を

ガシガシと削り取ると、その布が台布巾であることに気づき、ふと昔を思い返して溜め息をついた。

徐に自分の服装を見下ろしてみ、再度、今度は何処か諦めたように軽く息を吐く。

適当な服の上に、何年前に洗ったか見当もつかない草臥れた白衣。

彼が幾ら無頓着であり、自分と似たような格好で居るとしても、コレでは振り向いて貰えないのも無理はないかもしれないと、今更ながらに気づいたのだ。

少なくとも、研究に携わる前はもう少し女らしい格好をしていたものだったのに。

瞬間、頭を過ぎった思いに、思わず笑いが零れる。

女らしい格好を捨てる切っ掛けとなったのが、他でもない、部長への恋情だったからだ。

皮肉なものだと思いながら、何処か可笑しくてテーナは楽しげに笑ったのだった。

研究者は、己が研究に身を投じ、家族と過ごす時間をも顧みることがない。

私が研究者になろうと思いついたのは、そんな研究者に惚れてしまったからである。

ともすると研究室に引きこもり、関係協力者にしか会おうともなかった部長、ルド・エリテスに近付き、関係を保つにはコレしかないように思えた。

研究に取り組んでいる最中のエリテスは、真摯で誠実であつた。

そのすぐ傍で彼を手伝い、度々彼に名を呼ばれることが今の至福であるが、恋にうつつを抜かして研究に手を抜く程、私は莫迦では無い。

部長の信頼を得、少しでもその目に留まるよう、研究への取り組みには全力を尽くした。

そして、とつと部長の研究を完遂させ、研究に対する執着と興味を尽かす。

それが、今現在の最たる目標である。

『目標の為には、手段は問わない』

それは、うっかり気長に構えて居たら何時になっても恋人になれ

そうもない鈍感な部長に想いを寄せるテナだけではなく、自らの生涯の内に終えるかも分からない研究を相手取る他の研究部員達にも共通の心持ちであった。

……其れ故に。

それ故に、私達は、研究の為というのなら、親愛なる魔王陛下を【犠牲】にする事となっても、特に異論はなかったのである。

覚悟を持って歩む道のその先を、私達は知らない。

知らないからこそ、私達は期待と興奮に胸を躍らせ、その道を突き進むのである。

栄華に生きる偉大なる歩み 其の三步（後書き）

最後の文章、

「覚悟を持つて歩む道のその先を、私達は知らない。

知らないからこそ、私達は期待と興奮に胸を躍らせ、その道を突き進むのである。」

は、ポジティブ版とネガティブ版、二通りの意味に解釈できます。さて、魔研の命運は如何に（笑）

因みに、この三步の話で出てきた研究者云々の話は、只の偏見ですので鵜のみになさらぬようご注意ください。

几帳面で、綺麗好きで、日常生活を普通に営む研究者の方も多い筈です。

現在、私は夏バテにやられてグデグデです。
気温差激しいですので、体調などにお気をつけて。
では、また。

栄華に生きる偉大なる歩み 其の四歩（前書き）

久しぶりに一カ月以内に更新！

今日、ものすつごく暑かったですね。もう昨日だけど。

朝から30度越えなんて信じられない位だけれど、まだ8月半ば。なんかまだまだ、こんな日ありそうですね。

熱中症に気をつけねば！

皆さんもお気をつけて。

この『二代目勇者の災難』投稿ひとつ分は、携帯表示で2ページ以内っていう拘りがあったのに……。

この頃さっぱり、守れてません。

すっかり開き直ってしまつて、今回も3ページ。

いいや、書きたいだけ書いちゃおう

栄華に生きる偉大なる歩み 其の四歩

魔王城理化学研究部研究所では、主な研究対象として魔力を扱っている。

研究を進めるにあたって魔力は無くってはならない存在だった。

資料や実験媒体としては勿論のこと、実験器具や装置の動力も魔力なので、それはもう、膨大な魔力が必要なのである。

研究部員だけでは必要な魔力の百分の一も賄えきれない程の、膨大な魔力が。

足りない魔力は外部から調達するより他になかった。

外部から魔力を調達するには、魔力を宿す者から提供してもらう方法と、魔力が結晶化して固体状となっている【魔結晶】という物質を入手し使用する方法の二通りがある。

前者は人を雇うことで、後者は業者から買い取ることとで調達するのだが、どちらの方法にしたって、必要な魔力量に比例して莫大な金が掛かるのだ。

【魔結晶】はかなり希少な物質で需要もばか高く、市場に上がること自体が珍しい。

故に、大抵は人を金で雇う事で魔力を提供してもらうのだが、生物に宿る魔力は酷使すればその者が死ぬ危険がある。

かといって大勢から少しずつ調達してはそれだけで手間も時間も掛かり、それでは肝心の研究が進まないので、多少、命の危険がある事には目を瞑り、魔力量の多い者を数名雇って絞るだけ絞り取り、ローテーションで休ませる方法を取るようになる。

命に関わる上に長期間拘束する事にもなるので、それだけの大金を積まねば誰も雇われてはくれず、魔王城理化学研究部では常に魔力に飢えていた。

『科学技術による魔力生産方法の発明』を成し得るためには今まで以上に魔力が要る。

けれど、現在の研究費予算だけでは到底魔力が足りずに、最悪、研究自体を凍結し諦める羽目になるだろう。

予算会議では幾度となく、研究費予算増案書を提出し訴えてきたが、結果は惨敗。

なんとかしなくてはならない。

追い詰められた私達は、予てから目を付けていた魔王陛下に、とうとう手を出す事を決意したのであった。

私達が喉から手が出る程渴望している膨大な魔力を、陛下は日々垂れ流しにして無駄に持て余している。

嗚呼、なんて勿体ない！あれを使わずにいて何とする！

前々から、部長ルード・エリテスを始め、魔王城理化学研究部に身を置く者達は、陛下の魔力を研究に使いたいと羨んでいた。

しかし、陛下には行すべき執務がある。

研究に使う魔力の提供の為に魔王陛下を拘束し、研究に付き合わせる事は、真の魔王と影で噂される宰相のセズシルバスが許さないだろう。

昨日、完成したばかりの発明品である装置は、設定した対象者の魔力を、対象者の行動や居場所に関係なく、例えば対象者との距離が離れていようと、その装置の使用者が自由に使う事ができるというものである。

つまり、魔王陛下を対象として設定すれば、陛下が何処で何をしていたいようと、装置の使用者は好きなだけ魔力を頂戴する事ができるのである。

これで、少ない研究費を遣り繰りしていく苦悩とはおさらばだ
！！

足りない魔力の為に研究が進まず、悶々とする日々を送らなく

ても済む！！

そんな思いで私たちは笑みを交わし合い、部長は高笑いをしていたのである。

魔力供給源として対象を設定する為には、対象とする者の身体の一部を装置に取り込まなければならぬ。

医務室へと運ばれた翌朝、目を覚ました部長ルード・エリテスは、早速、自ら採取に出掛け、私はそれに付き従った。

「さて、テーナ君。」

今まで、向かい来る風を切るように廊下を突き進んでいた部長が、突然その足を止めた。

此方を振り向いた部長の深い藍色の瞳が、まっすぐに私を見つめる。

ドクドクと五月蠅い心臓をなだめ、動揺した事を悟られぬよう、まっすぐ部長を見返した。

「今から陛下を構成する体細胞の一部を採取しに行こうと思っているのだが、何処へ向かえば手に入るだろうか？」

部長は天才的な研究者である。

けれど、部長は研究熱心なあまりに他の事への興味がなく、研究以外の事についてはからっきしの駄目駄目っぷりであった。

陛下が居る所など簡単に見当が付く。城の者なら、それも裕に百年以上も城に仕えている者ならば、知っていて当然のそんな事でさえも、部長ルード・エリテスは知らなかった。

アルウス・テナは、未だ鳴りやまない心臓に、気が気ではなかったが、なんとか部長の問いに答える。

「そうですね、陛下に気付かれる事無く体細胞を採取するとすれば、陛下の私室で、落ちててる毛髪でも探せばいいんですけど、さすがに私達が陛下の私室に出入りする事などできません……。私達でも立ち入れそうな場所で陛下が居る所となると、謁見の間ぐらいだと思います。陛下が謁見の間を離れている間に玉座などを調べてみるといいかもしれません」

ちよつと声が上ずって、若干早口になってしまったような気がする、そんな説明にも、部長は何か勘づいた様子も無い。

ちよつとは気付いてくれたっていいのに！

理不尽な事は分かっていながらも、部長に対してム力つきを覚えただ、その時

「陛下の身体の一部など、何に使おうというんです？」

後ろから降って湧いた、何気ないその声に、ザッと血の気が引くのが、自分でも分かった。

その場で凍りついたように固まった、そんな私の様子にも、鈍感な部長は何ひとつ気付いた様子も無く、私の背後に居る人物に向かって馬鹿正直に答えてしまう。

「ハッハッハ、知りたければ教えてやろう。私の発明品が昨日、遂に完成してね。陛下の身体の一部さえあれば、陛下が何処で何をしたいようとも、好きなだけ陛下の魔力を利用できるのだよ」

影の魔王と囁かれるその人物のその顔は、……部長だって、知っている筈であつたのに。

部長は天才的な研究者ではあつたが、研究以外の事に対してはからっきしの、駄目駄目っぷりなのであつた。

振り向きたくない。

振り向きたくないけれど、自分よりも上の立場の者に、いつまでも背を向けている訳にはいかない。

私はギギギツと音がしそうな程のぎこちない動きで、固まった身体を振り向かせ、後ろの人物と向かい合った。

そこには

「ほう、それは素晴らしい発明ですね」

そこには、にこやかな笑みを浮かべる、魔界の宰相、セズシルバスの姿があった……。

終わった……。

栄華に生きる偉大なる歩み 其の四歩（後書き）

恋愛小説、読むのは凄く好きだけど、書くのは苦手。

恥ずかしくて、ぐおおおって悶えながら書いてるのですよ。
その割にぬるいですが。

うぐふぁ！って血反吐吐きなくなる気持ち、分かる人いらっしゃる
でしょうか？

そんな訳で、っていう訳でもないけれど、「栄華に生きる偉大なる
歩み」は次で最後です。

ホントはこの栄華の歩みは、部長視点で書こうと思っていたんです
よ。

恋愛なんて欠片も絡まず、始終、あの高笑いなテンションで。

男性陣ばかりで主要な女の子二人しか居ねーじゃねえか！

ってことで、女の子増やして、視点変えてみた訳です。

お気付きの方もいらっしゃるかと思いますが、この『二代目勇者』、
話ごとに「食」だとか「眠り」だとかテーマがある事があります。

今回のテーマは「研究」と「野心」、そして「歩み」。

其処に、視点変えたついでで気紛れに恋愛要素入れてみたのですが、
結果、

うぐおおおおと悶えながら書く破目に。

生温かい目でもいいので、どうぞ見守ってやって下さいまし。

栄華に生きる偉大なる歩み 其の五歩

魔王陛下を【犠牲】にするといいても、そんなに大した事をする訳ではない。

情けなくとも魔王陛下。

腐っても王様であるので、危害を加える様な真似は、絶対にばれない様に入念な細工を施してから実行すべきである。

今回のケースについては、犠牲という言い回しは大きすぎたかと訂正しよう。

私達はこっそりと、陛下の在り余る魔力を少々拝借しようとしていただけなのだ。

多少の危険があった事については、生きてる間には付き物なのでご寛恕願いたい。

決して、陛下に対しての害意が有った訳ではないのである。

そんな言い訳が頭の中を咄嗟に過るが、凍ったように固まる私は声を出す事すら出来ない。

後から冷静になって振り返ってみれば、その言い訳には余計な事

も多分に含まれていたから、言葉に出来なくて良かったんだろうけど、声も出せずに固まっていた私には、目の前で余計な事を喋りまくる部長を止める事だって、出来はしなかったのである。

私が茫然と固まっている間にも、部長は宰相に問われるがまま、発明品の名称から使い方、形状、材質、仕組みや理論。果ては現在の保管場所までも教えていく。

部長は研究熱心な馬鹿であつたが、私は恋に盲目となつた間抜けであつた。

此処は廊下のだ真ん中。

それも地上階で一番広く通行人の多い中央通路であり、今も、二十人は裕に並んで通れそうなこの廊下を、多くの者達が行き交っている。

こんな場所で、あんな話をするべきでは無かつた……。

「では、その発明品は今日の午後にも、私の方まで提出に来て下さい」

一通りの話を部長から聞き出した宰相閣下は、清々しい笑顔でそう宣つた。

部長は鳩が豆鉄砲を食らった様な顔をしている。

「は？何故私の発明品を渡さなければならぬ」

「その発明品は国の予算で作られたのでは？」

「違う、コレの材料費や研究費は研究所に属する部員らでそれぞれ出し合って賄ったものだ！」

宰相の問いに強気で反論する部長。

彼に見つかった時点で、全ての希望は風前の灯となって消える運命にあると云うのに……。

「そうであつたとしても、先程聞いた話から察するに、それは国家予算によつて研究設備が整えられた研究室で作られたのでしょうか？何より、貴方方研究者との契約書には、『研究基盤を整え毎月契約金を支払い生活を保障する代わりに、魔王城理化学研究部研究所に所属している間の研究成果は全て、魔区全体の為に、魔王城中枢機関の決定に基づいて利用される』旨が記されておりましたが？」

何百年も昔にサインした契約書の内容など、憶えているのはこの宰相くらいではないだろうか。

『何か問題でも？……ある筈がありませんね』

そう言外に告げて来る宰相の微笑みに、部長の反論は完膚なきま

でに叩き潰され、敢無く発明品【魔法の杖】は、宰相セスシルバスの手に渡る事となったのである。

あれの費用で魔力提供を受けて本命の研究を進めていれば良かった……。

どうせ取り上げられるなら、自腹で製作なんかしなかったのに……。

茫然自失となった私達に、宰相閣下は告げる。

「ああ、研究成果を上げた際の特別手当に関しては、契約に基づききちんと支給されるので安心してください。では、また後ほど」

【魔法の杖】の研究製作費に比べたら、特別手当など雀の涙ほどしかない。

慰めにならない言葉を掛けて、宰相閣下は部長の横をすり抜けていく。

ところで、私達、魔王城理化学研究部の部員には、夢中になるとその他の事があまり目に入らない、目に入ったとしても特に気にならないという困った性質があった。

宰相セズシルバスが私達の横を通り過ぎて何歩も進まない内に、
「部長く、アルワスくく」という何とも情けない声の叫びが
聞こえた。

呼び声に顔を向ければ、此方に走り寄るのは魔王城理化学研究部に
して歴代最年少の研究部員メデセール・ウエルノット君である。

彼は顔面を蒼白にし、息せき切ってふらつきながらも報告する。

「大変ですっ！第一種絶滅危険魔獣達が、城外へと逃げだしていま
した！」

日頃からよく通る、声変わり前のその声を、廊下中に響かせなが
ら。

その報告に、胃の腑の冷える、思いがした……。

絶滅危険魔獣とは、その名の通り、絶滅の危機に瀕する希少な魔
獣達のことであり、他の種族を絶滅の危機に陥れる危険な魔獣達の
事である。

生態調査や魔力研究の為に、研究所の職員達で管理・保護をして
いたが、ここ数日（いや、一週間？）程は、【魔法の杖】が完成間
近となって研究が佳境に入り、……誰も世話をしていなかったかも
しれない、と思い当った。

中でも、第一種というのは希少度も危険度も最高ランクに高い事を示す分類であり……、嗚呼、頭が痛い……。

今日はとんだ厄日である。

我が研究所のマスコット、タイリクオオウミガメのリクちゃんも、第一種絶滅危険魔獣に認定された希少で危険な魔獣であった。

何故あの時、特殊ケージの中に居る筈のリクちゃんが、掴み易い手近な位置に居た事を疑問に思わなかったのだらう。

後悔先に立たず。

後ろを振り返りたくないと思いつつも、報告の義務がある為に、振り返らない訳にもいかない。

ギギ、ギ、と音がしそうな程のぎこちない動きで振り返れば、やはりというか其処には、魔界の宰相セスシルバスの姿があつて……、

顔に浮かべたその笑みは、目が、笑っていないかつた……。

嗚呼、終つた……。

同時刻、魔王城西に広がる魔空樹海には、ひとりの人間が入り込んでいた。

魔空樹海とは、魔区と魔区外との境にあたるゲセドル山脈に広がる特殊森林域である。

空間自体に魔力が深く染み付いていて、古くから、異様な成長進化を遂げた野生魔生物が跋扈する無法地帯となっていた。

太い樹木が巨大な蛇の如くにうねり、絡み合い、空をも地面をもその男の目前をも覆っている。

唯一の細い道を頼りに、男は突き進んでいた。

視界の悪いその場所で、何も知らずに男は歩く。

否、何も知らないからこそ、男はその道を歩んでいたのである……。

広大な魔空樹海の奥深く、男の悲痛な叫びが響く。

……その場所には今、逃げ出した絶滅危険魔獣たちの多くが潜み彷徨

徨っていたのであった。

助けを求めるその声が、新たな獣を呼び寄せる。

……その事を、男は知らない。

知らないからこそ、男は叫び続けるのである。

男の悲痛な叫びは、いつまでも響き渡る……という事も無く、まもなく、その叫び声には終止符が打たれた。

……魔王城理化学研究所のマスコット、第一種絶滅危険魔獣のリクちゃんによって、

騒々しかった魔空樹海には、『惨劇の後』という名の沈黙が訪れたのである……。

栄華に生きる偉大なる歩み 其の五歩（後書き）

『アーメン。』

って最後に入れたかった……。

この「栄華に生きる偉大なる歩み」の話。

このサブタイトルを思いついた時点で、五歩までと決めていました。

「三歩進んで、二歩下がるうゝ」 （合わせて五歩）

というフレーズに引っかけ（ー＊）

宰相に出くわして歩みに影が差すのも、四歩目からになるよう調整したのです。

進んでも退いても近付いても遠ざかっても、

栄華に生きる偉大なる歩みのその一歩。

負けるな魔研！

三步の後書きで言っていた『ネガティブ版の解釈』。

素直な人には分からなかったかも知れませんが、この五歩の後半で分かるかと。

絵本に映る白光と黒闇 閃の一色（前書き）

お久しぶりです。

ギリツギリになりましたが、なんとか2ヶ月未満で更新。

（*）

注・この世界観での「魔物」とは、「異形や異能を持つもの」の事です。

絵本に映る白光と黒闇 閃の一色

魔区と魔区外とを隔て、全てを見降ろすかのように佇むゲセドウル山脈。

空には鈍色の雲が立ち込め、世界に重たい影を落としている。

魔区に存する己が我城から鋭い眼差しでその麓を見下ろし、魔王ベルディルガ・ジョセフは呟く。

「いよいよか……」

暗い室内で窓辺に凭れ掛け、外を眺める魔王ヴェルディルガ・ジョセフ。

不吉な予感呼び起す景色に、彼が口元を引き上げて不敵に笑った……その直後。

「ねえ、魔王さま」

場違いに響いたのは間延びした明るい女の子の声。

暫しの沈黙の後……、振り返った魔王ジョセフのその顔は、折角のシリアスな雰囲気なぶち壊しにされたが故の仏頂面だった。

「なんだ？」

不機嫌も露わに返事をした魔王は、部屋の入り口からこちらを覗くバпамメレを睨む。

どうやら通り掛かりに声を掛けてきたらしいバпамメレは、特に気にした風もなく続けた。

「さつき、魔空樹海を歩いてたんだけど。偶々、カニ足男を見掛けてねえ」

出てきた単語にギョツとしながら、魔王が叫ぶ。

「カッ、カニ足男って言うなあッ!!」

もはや、シリアスな雰囲気などは微塵もないが、その事に魔王が気付く事はない。

「はいはい、ガニ股男ね、がに股男」

「ちつがあゝう!!」

拉致の明かないやり取りに、頭を抑えて魔王は叫んだ。

五月蠅い魔王に、眉を顰めるバпамメレ。

「もー、めんどくさいなあ。どっちだっていいじゃん」

「どっちも良い訳あるかあああッ!!」

面倒くさい魔王の主張を無視し、バпамメレは当初言い掛けていた事を口にした。

「それで、そのがに股男なんだけど、なんか死にかけてたよ？」

「 つつ!!?」

声にならない三度目の叫びを上げた魔王ジョセフは、抱えていた絵本も投げ出して一目散に部屋を飛び出していく。

不吉の象徴バпамメレが去った後。

空に垂れこめていた暗雲は崩れ去り、穏やかに広がる青空から暖かな日差しが魔界全土に降り注ぐのであった。

ページが開かれた状態で、床に投げ出された一冊の絵本。

窓からの陽光に照らされたそれには、優しげな女神と真摯な眼差しの青年が描かれていた

* * *

昔々、女神ユセルアースによって創られたこの世界は、女神様の恩恵でとても豊かで美しいものでした。

大地は肥えて、水は清らか。風はとても優しく吹いて、緑は美しく芽吹きます。

人々は女神様に知恵を賜り、感謝を捧げながら穏やかに慎ましく暮らしていました。

しかし永い時が経つ内に、何時の頃からか人々は女神様の事を忘れていつてしまいました。

豊かな暮らしを当たり前のものと考え、ただ日々を楽しく過ごす事ばかりに夢中になったのです。

人々は勉強も仕事もろくにしなくなっていました。

いくら女神様の恩恵で、豊かな大地と水が与えられようと、人が種をまき、水をやり、芽を育てなければ、作物は収穫できません。

女神様は何度も忠告しましたが、楽しみに耽る人々は、いつしか女神様のお言葉を聞く事が出来なくなっていたのです。

「やがて人々の怠惰な心や慢心は、良くないものを生み出し引き寄せる事でしょう。」

女神様は悲しみの涙を落とし、憂いの吐息を洩らしました。

少なくなった食料を廻って人々は争い、人の心は荒んでいきます。

そして、女神様の懸念の通り、世界に良くないもの　魔物がそこらに蔓延るようになってしまったのです。

人々を哀れに思った女神ユセルアーナス様は、ある村のひとりの若者の夢に出てこう言いました。

「このままでは悪しき魔物の手によって、世界は滅んでしまいます。貴方に私の加護を授けましょう。貴方は勇者となり、魔界に行って魔王を封じるのです」

こうして勇者となった若者は、世界を救う旅に出たのでした。

* * *

開かれたまま放置された絵本には、やがて二つの影が差す。

「ねえ、これ。魔王さまの絵本だよね？」

「ああ、この頃いつも持ってたよね」

静かな室内に響いたのは、まだ幼い少女と少年の声。

床に落ちていた絵本を拾い上げたのは、少年だった。

少年は絵本をパラパラ捲り、その赤い瞳の色とは裏腹に、子どもとは思えぬ程冷めた視線でそれを眺めながら隣の少女に問いかけた。

「ねえ、知ってる？」

少女はくるつとした大きな目を瞬かせて首をかしげる。

「何のこと？」

「あの噂」

「あの噂ってなあに？」

「ふーん。知らないんだ？」

「うん。教えて」

訳知り顔で意地悪く笑った少年に、少女は素直に教えを請う。

若干つまらなそうに鼻で息を吐いた少年は、白けた顔で少女に教えた。

「魔王さまがお芝居をするんだって。この絵本を台本に」

そう言って示された絵本を、少女は藍の瞳を輝かせて覗き込んだ。

「ほんと？わあ、楽しみ！どんな絵本なの、これ？」

「魔区外の人間が、勇者として魔王さまを倒しちゃうんだ」

「えー！？魔王さまを倒しちゃうの！？魔区外の人間が？うつそだあゝ」

「お芝居だから、フリをするんだよ。魔王さまが只の人間にやられる訳がないからね」

淡泊な少年の白いズボンからは、艶やかな毛並みの狐の尻尾が生えている。

そして、くると表情を変える少女のキルトで出来た黒いスリ

「トからは、ふさふさとした狸の尻尾が揺れていた。

「そっか！そうだね！魔王さま、強いもん」

「……魔王さまは、特別だからね。あの方には誰も敵わないよ」

一気に表情を明るくした少女に、少年は不満げながらも相槌を打つ。

「ねえ、クルス。クルスは物知りだね」

「レディアスが知らなさ過ぎるだけだよ」

突き放すように言い放った少年　クルスに、少女　レディアスはムツと頬を膨らませたが、絵本の一部に氣を取られると、ころつと忘れたようにまた問いかける。

「ねえ、クルス。どうしよう？魔物のせいで世界が滅んじゃうって。私達も魔物なんだよね？」

疑う事を知らないレディアスに、クルスは溜め息を吐いた。

「そうだけど、魔力を持つてる者が居たって世界は滅びたりなんかしないよ」

「じゃあ、なんで魔物は悪者なの？」

「さあね。只の人間にしたら脅威に見えるからなんじゃない？」

「それって、強いから悪者ってこと？」

「簡単に言えばそういう事」

レディアスは少し考える様にして、また、問いを重ねた。

「じゃあ、魔王さま、お仕事サボったりとか悪い事しなかったとしても、すごく強いから悪者ってこと？」

「うん、まあ、そういうこと。……普通は、仕事サボったくらいでも、悪者呼ばわりなんかされないけどね」

「そっかあ」

頷いて、暫く何かを考えていたレディアスは、ふと表情を曇らせた。

「……ねえ、クルス。魔王さまみたいに強くなったりなんかしないでね！」

いきなりの言葉に、クルスは訝しげな顔をする。

「なんで？」

「だって、勇者が倒しに来ちゃうかもしれないじゃない！」

「魔王さまみたいに強かったら、只の人間なんか倒されたりなんてしないよ」

「ああ、そっかあ」

呆れた様な、それでいて柔らかな声音でそういうクルスに、レディアスはパツと顔を輝かせ、満面の笑みで納得した。

「そっか、そうだね！」

うんうんと頷くレディアスは、またしても直ぐに表情を変えて不思議そうに呟く。

「それにしても、なんで急にお芝居なんでしょうと思ったんだろう？」

「さあ？何でだろうね」

白髪を後ろで一つに括った少年と、黒髪を高く二つに結わえた少

女。

閉ざされたその一室に、対象的なふたりの姿を見る者は無く、疑問に答える者も無い。

問いを含んだ二つの声は、只、部屋に響いて消えてった。

絵本に映る白光と黒闇 閃の一色（後書き）

文字数が5万字を突破しました！奇跡！

読むのに100分掛かっちゃいますよ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7952p/>

2代目勇者の災難

2011年11月14日03時39分発行